甚兵　善六どん、面目次第もない。五十日ぶりで娑婆の人に逢ひます。

しづ　エヽ、縁起の悪い。死んだ者か何ぞのやうに。サアく、その着物脱いで、これと早う着替へさんせ。

ト前垂れより着物、鼻紙、莨入れを出し

サアく、鼻紙も莨入れも持つて來たわいなア。

甚兵　こりや御臺所お出かし。なんだ、着物は結城木綿、鼻紙は半紙の四つ折、莨入れは、せいしつのあぶみ。

しづ　ほんに、それで昨夜から、忙がしい目をしたわいなア。

善六　イヤモウ、鬼の女房に鬼神ではない、佛といはうか、神といはうか、結構なお内儀、必ず仇に思はつしやるな。

甚兵　とんと合點が行かない。おれが内濟の尻金が百七十兩、牢見舞ひも三日にあけず、今日の支度や何やかや、〆めて見れば餘ッほどの金高、この金の出所は。

しづ　サア、その金の事も、案じさんすは尤もぢやが、マアく、めでたい、無事で赦免されしやんした祝ひに、ナ、善六さん。

善六　それく、ちよつと杯をささうと、あそこへ買うて來た、こなからと中がさ。

ト袂より貧乏徳利と中がさを出す。

甚兵　こりやアよく氣が付いた。牢内へ行つてから據ろなく禁酒。ドレ、久しぶりで、やつつけばゝアに茶ぢやアない、酒にせう。

ト善六つぐ。甚兵衛飲んで、お賤思ひ入れにてこの酒を飲むうち

善六　さらばお肴を進上いたさう。

ト腰より證文を出して甚兵衛にやる。甚兵衛取つて開き

甚兵　「遊女奉公人請狀之事……一、此しづと申す女、三年季二百兩に相定め、遊女奉公に召抱へ候ふ處實正也」……ヤ、そんならわりやア、身を賣る氣か。

しづ　こちの人、堪忍して下さんせ。これが別れでござんすわいなア。

甚兵　べら坊づらめ。駕籠昇きこそすれ、おれも甚兵衛さまだ。女房賣つて濟まうと思ふか。なぜこんな事をしやアがつた。

しづ　これもみんな、お前の心がらぢやわいなア。

ト胸ぐらを取る。合ひ方。

コレ、こちの人、これが否さに、平常わたしが云はぬ事か。知らぬ呉服より知つた小糠、商ひとやら、細い儲けも、正道に精出して下さんせ、夫婦共持ぎにしたならば、過ぎられぬ事はあるまいほどに、悪氣をやめて下さんせと、意見いふのも糠に釘、まだしも慰み悪酒、揚句の果に。

ト思ひ入れ。

此やうに牢屋へ入る科を仕出かし、償ひ金何やかや、力づくにも、器量にも、つばめたところが二百兩、なんのわたしが手仕事の、女髪結ひ位して、大枚が調ひませうか。飽かぬ別れも不埒ゆゑと、心を入れ替へて下さんせえ、……苦界といへど現在の、お前の命がはりと思や、わたしや笑うて。勤めに行きますわいなア。

ト縋り泣く。

甚兵　べら坊め、どんな事があらうとも、われをふんばりに賣つて濟むものかえ。

善六　イヤ、甚兵衛どの、お詞のちうだが、知つての通り、わしやァ質屋の手代、ぜげん中次ではあるまいし、こんな世話をする筈もござらぬが、心安くするお賤どの、さて斯うくいふ金の要る道どうしたらよからうと、ぶつけて相談されたが因果の始まり。そこで思案を付けて、心やすい判人に約束し、こなたが出てさへ來れば直ぐにの約束で、親方の金を二百兩、證文書いて間に合せ女房の勤めがさせられぬと云へば、こなたが、この二百兩濟まして出るか。

甚兵　サ、それは。

善六　命がはりの恩金、甚兵衛どのだけに踏まれまいが。

甚兵　サア。

善六　サアくく、この金の筋道は。

甚兵　ハテ、やかましい事はない。質をやらう。

善六　エ。

甚兵　おれが大事の預かり物だが、寶は身のさし合せ。ソレ、二百兩の抵當。

ト以前の香合の箱を出して渡す。

善六　これを二百兩の質とは。

甚兵　それこそ下絵鴻野の寶、胡蝶の香合。

ト善六あけて見て

善六　成る程、聞き及んで居るこの香合、いかにも二百兩の質に取らうが、道具質は十日切り。

しづ　モシ、何ぢややら譯も知らぬが、また咎めの來るものぢやないかえ。

甚兵　ハテ、まだお仕着せも脱がないうち、尻の來る事をするものか。

しづ　ぢやというて、最前の侍ひの素振りといひ、勤めせぬのは嬉しいけれど。

甚兵　ハテ、底の底まで念を押す女だ。

しづ　して、マア十日が内に。

甚兵　十日が内には、また面白い風も吹くわえ。

善六　この香合が二百兩の質と極れば、こんな物には取かはせの一札が要る。ちよつと爰で

ト矢立にて鼻紙へ二枚書き

こなさん方からも、間違ひないといふ一札。又わしが方からは質物を、質に取つたといふ。

ト判を捺して甚兵衞に見せる。甚兵衞取って

甚兵　「一、金二百兩、右は胡蝶の香合質物に預り置候處實正也、十日切に受戻させ候對談に御座候甚兵衞殿へ、質や手代善六……」成る程、こりやアよいが、わしが方からやる一札には、いま印形が。

善六　ないも承知、跡から捺して寄越さつしやい。

甚兵　そんならさうよ。嚊ア、預かつておきや。

善六　時に、そんならわしは、もう歸りませう。

しづ　これは何かと、大きにお世話樣でござんした。

善六　甚兵衞どの、十日切りを忘れさつしやるな。

ト合ひ方、時の鐘にて、善六、香合の箱を懷へ入れ、向うへ入る。あと合ひ方。

甚兵　ハテ、よく馬鹿念を押す野郎めだ。

しづ　其やうに云はしやんすな。あの人が世話したりやこそ、金も出來たといふもの。

甚兵　べら坊め、それも利足や分一を取る慾づらだワ。

しづ　それはさうと、お前も歸らしやんせぬかいなア。

甚兵　イヤモウ、ちくらになつて來たよごれ、歸つた面を友達に見られるも氣障だ。とつぷり暮れてから。

しづ　そんなら着物を着替へさんせいなア。

甚兵　どうか夕だちが來さうだ。仕立て卸しを濡らさうよりは、お仕着で歸るべい。

しづ　エヽ、ほんに人の苦勞を無にして……さうしてマア、暮れてからでは髪結床も仕舞はうぞえ。

甚兵　仕舞つたら明日の事よ。

しづ　ぢやというて、ちつとの内もむさくろしい。

甚兵　むさくつても穢なくつても、濡髪のお賤と名を取つた、おぬしといふ美しい女房を持つて居るわえ。

ト引寄せる。

しづ　エ、モウ面白さうに、置かしやんせいなア。

ト振り切り、此方へ寄るとたん大雷。お賤恟りして

オ、怖。

ト甚兵衛に寄りそふ。

甚兵　ハテ、野暮でない雷だ。

ト お賤を引寄せる。時の鐘のだら、雷の音にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて石の地蔵、正面獄門臺、切り首、側に誂らへの捨て札、地蔵の前に花立、水向け茶碗などあり、うしろ黒幕、薄原、よき所に据ゑ物の松。上の方、流れ灌頂、誂らへの通り。爰に關屋、茶屋場の形、手拭にて顏を隠し、立ちかゝり居るを、野伏り三人、關屋が小脇を

取つて居る見得、右の鳴り物にて道具とまる。

野一　サア〳〵、みんな、この女を、薄の中へ擔ぎこめ。

二人　合點だ。

ト引立てるを

關屋　マア〳〵、待つて下され。こなさん方に見付けられたら、せう事がない。いかにもわしや、あの首を盗みに來た者。

三人　そりやこそな。

ト首に向ひ

關屋　モシ、十次兵衛さま、淺ましいお姿におなりなさんしたなア。わたしや云ひ交した早でござんす……この場の樣子を聞くよりも、恐ろしいやら口惜しいやら、おのれやれ、女子でこそあれ夫の死恥、いつまで人に晒させうぞ。人知れず取り隱し、いかなる寺へも葬らんと、此やうな恐ろしい氣苦勞をしますわいなア。

ト三人に心遣ひして泣く。

野一　聞けは聞くほど氣の悪い話しだ。

野二　大聲立てゝもこの縄手。
野三　誰れも外に來る者はない。
野一　夜の明けるまでにおッ放せ。
皆々　それがいゝ〳〵。

ト關屋にかゝる。關屋突きのける。よろしく立廻り。此うち時の鐘、合ひ方にて、向うより南與兵衛、半合羽、股引、脚絆、一本差しにて、紙合羽を肩へかけ、三度笠をかざし、つか〳〵と出で來り、花道にて獄門臺を見て思ひ入れあつて、舞臺へ來かゝり、この體を見て與兵衛、三人を取つて投げる。三人起き上がつて與兵衛にかゝる。與兵衛有合ふ割木を取つて打ち散らす。三人これにて、ばら〳〵と下座へ逃げて入る。關屋息切れして茫然として居る。

與兵　ヤ、コレ、見れば女中さうなが、今のは慥かに乞食めら。こりや物取りか理不盡か。コレ、お女中。

トあたり見廻し、地藏の前の水向茶碗にたまりし水を飲ませ

コレ、女中、氣を慥かに持たつしやい。

ト關屋、人心地付きし思ひ入れ。

關屋　ハイ〳〵、どなたか存じませぬが、今の難儀をお救ひ下さりまして、有り難うございます。

與兵　なにサ、わしは往來の旅人、來かゝる矢先に今のしだら、高が乞食めら、追ひ散らして進ぜたが

ト關屋をよく見て

併し、合點の行かぬは夜更けて一人、この縄手、女の身で、どうして爰へござつたのぢや。

關屋　サア、それはな。

與兵　道に迷うてか、但しは駈落ち。連れにはぐれた、といふやうな事で爰へ。

關屋　成る程、仰しやる通り、道に迷ひまして。

與兵　して、町所はどこでござる。

關屋　江戸の淺草……並木でなし、藏前でなし。

與兵　淺草というても廣い事。アゝコレ、送つて進ぜたけれど、わしもちつと叶はぬ用で、奥筋へ急ぎの旅。道も違ふといひ、氣の毒ながら、一人早うござるがよい。サア〳〵、また今のやうな惡者に出合はぬうち。

ト首へ目を付け、關屋をせり立てる。

關屋　サア、參りは參りますが、少つとわたしも。

ト首を見て思ひ入れ。

與兵　どうさつしやれた。

關屋　今の難儀に足を痛めましたによつて

與兵　ムウ、疵所とあらば藥を進ぜう。

ト出しさうにするを

關屋　アヽモシ、藥はわたしも所持して居りまする。お急ぎならば、あなたマアお早う、私しにお構ひなく、お出でなされませいな。

與兵　アヽ、參りは參らうが……アヽコレ女儀、其許が歸らつしやるを、見屆けねば不安心。

關屋　御深切が却つて……イヤ、それ程に仰しやる事なら、私しもそろ〳〵參ります程に、あなたもお出でなされませいなア。

與兵　其許も行かつしやるなら、拙者も參るでござらう。

關屋　左樣なればお旅人樣。

與兵　お女中。

關屋　いかいお世話樣。

與兵　お別れ申す。

ト合ひ方になり、與兵衛は東のあゆみ、關屋は花道へかゝり、雙方思ひ入れあつて、取つてかへし、

抜け道して獄門臺へ兩方一緒にかゝり、行きあたり、惝りして

ヤア、こなたは今の女中。

關屋　お旅人樣。

與兵　まだ行かつしやらぬか。

關屋　あなたも、まだお出でなされませぬか。

ト慄へる。

與兵　サア、身共は、こなたの事が案じられて、ツイ爰へ。

關屋　お戻りなされたは

與兵　サ、袖ふり合ふも。

關屋　他生の緣と

與兵　女中へ深切。

關屋　ハテナア……御深切とあるなら、あなたにちつと折入つて、お願ひ申したい儀がございますが、

お聞き屆け下さりませうか。

與兵　そりやハヤ、身に叶うた事なら何なりと、早く云はつしやれ〳〵。

關屋　サ、そのお願ひと申しますは。

與兵　願ひとは。

關屋　爰にかゝつてあるあの首を

與兵　ヤ。

關屋　どうぞ盜んで下さりませ。

與兵　なんと。

關屋　サ、斯うばかり申しては、御合點が參りますまい。私しはあの首にゆかりの者、いかに御成敗ぢやというて、あのやうに晒され、死恥が悲しさ。夜半に紛れ。盜み取らうと參りましたが、どういふ事にやあなたも、爰に長うお出でなさるゝうち、見咎められては水の泡と、是非なう樣子を

與兵　ムウ、この首にゆかりとは……してマア、こなたは、どういふ縁ぢや。

關屋　サア、わたしやあの首の、女房でございます。

與兵　ヤ。

關屋　南方十次兵衛と記しあるあの首は、わたしが夫。

與兵　コレ、合點が行かぬ、その十次兵衛といふは卽ち

ト云はうとして思ひ入れ。

關屋　エ。

與兵　ハテ、こなたが、その十次兵衛の女房でござるよなア。

關屋　サア、それぢやによつて。

與兵　取隱したいといふも尤も、去りながら、女の身でそれ程に、思ふは慥かに。

關屋　云ひ號けといふでもなし、祝言はせず、お顏も知らず、恥かしながら、ふとした御縁。

與兵　ついした轉び合ひといふやうな事か。

關屋　思ひ出せば去年の秋、友達衆に誘はれて

與兵　鹿島へでも參らしやつたか。

關屋　妹背を願ふ常陸帶、浮きたつ旅の木おろしに

與兵　頃しも月の入江潟、闇はあやなき夜船のうち。

關屋　乘合ひ同士の手がさはり、蘆間の風も戀風に……變る姿の

ト獄門の首へ思ひ入れ。

與兵　死顔も、思へばはかない。

トこれも首へ思ひ入れ。

關屋　サア、夢に夢見る人の身の

與兵　水の流れと定めなき。

關屋　戀は無常の

與兵　始めの嘘も

關屋　後の誠と

與兵　その馴染めが

關屋　二世の約束

與兵　一生の

關屋　かためも

與兵　かたい

關屋　わが夫。

與兵　女房。

關屋　舟玉かけて

與兵　かたらひし

關屋　その時の

與兵　女子は

關屋　男といふは。

與兵　南方十次兵衛といふ、あの獄門の首ではないか。

關屋　サア……その時の荒まましを、よう御存じのお前は。

與兵　イヤ、今の話しも、ありや身共が當て推サ。

關屋　ハテナア。

與兵　云ふに云はれぬこの場の仕儀……唯一言の云ひかはせを、死去の跡までよく守り、首を葬りたいとあらば、いかにも盗み遣はすまいものでもないが、なんと女中、こなた、身が女房にならぬか。

關屋　エ。

與兵　サア、いはゞ盗賊盗人の荷擔人、他人では致し憎い。
關屋　成る程、御尤もではござりますけれど、望み叶へた上からは、千筋と撫でし黒髪を、剃つてわたしは尼法師と、
與兵　ハテ、愚癡な。尼になれば別れた夫が浮むといふ、きつとした事もあるまい。
關屋　ぢやというて。
與兵　サア、身共も氣が急く。あの首級、あゝしておけば取捨てられ、鳶や烏の餌食となるが、何とも不便。
關屋　それぢやによつて
與兵　女房になるか。
關屋　サア。
與兵　否なら此方もこの事を、あからさまに訴人せうか。
關屋　アヽモシ、それでは。
與兵　これが誠に首と釣りがへ。女中、返事はどうでござるな。
關屋　是非に及ばぬ。そんならお前の。

與兵　詞に任すか。
關屋　サア、それも年切つて三年がうち。
與兵　ムウ、三年切りとは夫の年忌。
關屋　それが過ぎたら三下り半。
與兵　半座を急ぐ法の道、年切りの女房、承知いたした。
關屋　して、お前の所、名は何と。
與兵　サア、名も云はれねばそれぞとも、行くへ定めぬ浪人同然。
關屋　わたしも丁度その通り。
與兵　ハテ、似たもの夫婦。
關屋　してマアこの末、何を當てに。
與兵　ハテ、互ひの心はこの石ごき。
ト合ひ方になり、最前の水向け茶碗へ、流れの水を汲んで、關屋の前へ置く。
關屋　これは。
與兵　茶碗へ斯う水を汲んだところは、とりも直さず月の形、緣と月日を待つ心で

關屋　水杯も祝言も
與兵　ほどは雲井に隔つとも
關屋　空行く月の
與兵　めぐり逢ふまで。
關屋　割符の筐。

ト此うち兩人、茶碗の水を互ひに飲み、與兵衞、茶碗を二つに打割り、片々を關屋にやる。

與兵　割れた茶碗も
關屋　繼ぎ合はせ
關屋　夫婦も圓き
關屋　緣にまかせて
與兵　女中。
關屋　お旅人樣。
與兵　必らず詞を
兩人　つがひましたぞ。

ト四ツの鐘鳴る。

關屋　ありや夜中。

與兵　更けぬうち……ソレ。

ト合ひ方、時の鐘にて、與兵衞探り當り、切り首を取りにかゝる、關屋あたりを窺ふうち、與兵衞、首を持ち來り、思ひ入れあつて。

出離生死頓生菩提南無阿彌陀佛。ア、、持つべきものは。

關屋　エ、。

與兵　女房……夫の首級ぢや、少しも早う。

ト與兵衞關屋に囁く。關屋、探り廻り、下の方流れ濱頂を引切り、與兵衞の首をこれに包む。

關屋　忝ない。

與兵　コレ。

ト押へる、忍び三重にて、上の方の薄原を押しわけ、甚兵衞、以前の形にて、この體を見て居て、よき程に出る。此うち與兵衞、關屋に早く行けと思ひ入れ。關屋、首を持ち行かうとするを、甚兵衞引留める。與兵衞甚兵衞を探り見て惝り、甚兵衞は兩人の顏見たき思ひ入れ。與兵衞、白刃を拔きかける。甚

兵衛、兩手にて頭を押へる。兩人思ひ入れ。甚兵衛尻餅をつく。これを木の頭、三人烈しき立廻り。

よろしく、ひやうし　　幕

跡シャギリ

四幕目

鳥越山崎屋の場

役名――山崎屋與次兵衛。山崎屋淨閑。若黨、丹平。小揚げ、百介。同、九郎八。川瀧屋市兵衛。丁稚、善太。肴屋、ぶえんの七。藤屋次兵衛。鬼あこや孫六。米屋仁右衛門。講中、妙貞尼。山崎屋番頭、權九郎。藝者、みやこ實ハ甚兵衛女房お賤。下駄の市實ハ三原傳藏。山崎屋與五郎。次部右衛門娘、お照。橋本次部右衛門。

本舞臺、三間の間、上の方障子屋體、正面戸棚のれん、下手に土藏引戸の門口、出入りの番屋、すべて鳥越米問屋のかゝり。權九郎、番頭にて帳合ひしてゐる。善太、丁稚にして莨盆の掃除して居る。百介、九郎八、小揚げの形にて土藏へ俵を運び居る。次兵衛、藝者の親方にて下の方に扣へ、淨閑、魚の値をして居る。ぶえんの七、魚荷をおろし居る。この見え、テンツヽにて幕明く。ト捨ぜりふにて百介、九郎八、米を藏へ運ぶ。

淨閑　モシ〳〵、旦那、その松魚は、四百五十では、ぢぎりが切れますわいの。

七　これはしたり、おぬしもヤア減相な。ぢぎりの切れる商賣を、商人の身でなぜするのぢや。

淨閑　ハテ、そこが商賣でござりまする。

七　損をするも商賣なら、とてもの事に、もう五十損して四百にしやれ。

淨閑　イヤ、呆れた旦那だ。モシ、拵へませうかえ。

七　イヤ〳〵、その代り手は賴まぬ。おれがせにや魚に無駄が出る。まづ片身を刺身にして、片身は鹽にして、あらは煮つけ、頭は叩いて鹽辛ぢや。

淨閑　モシ〳〵、頭をあがりますか。

七　松魚の頭が喰はれいでかいの。この男は商人のやうにもない。

百介　コレ〳〵、旦那は松魚の頭どころではない、毎日出入りのおいらには、水瓜の皮の香の物を食はせるワ。

九郎　汁といつてはかゞみ汁、鬢に白髮の何本あるといふ事が

百介　あり〳〵と映る。

善太　コレ、魚屋さん、額でもぬかば、此方の内へ來て、おつけを鏡にぬきなさい。イヤ、奇妙だよ。

淨閑　默りをらう。また内の噂しをるか。コレ、權九郎、あの餓鬼め、今日一日喰はすな。われに云ひつけたぞ。

權九　ハイ〳〵、御料簡なされませ。善太めは餓鬼とも思ふが、コレ〳〵、こなた衆まで同じやうに、お出入りをとめられぬ用心さつしやいよ。

百九　それでもお前、あんまり吝い内だから。

權九　これはしたり、その噂は云はずとも知れて居るわな。

次兵　モシ〳〵、權九郎さまえ。若旦那の與五郎さまは、まだお歸りではござりませぬかな。

權九　サ、昨日から出られて、まだお歸りはないのよ。

淨閑　コレ〳〵、權九郎、ありやどこの人ぢや。

權九　ヘイ、あの男は。

トうぢ〴〵する。

淨閑　コレサ權九郎、何の用で見世へ來てゐらるゝのぢや。間には茶の一杯も飲ませにやならぬ。これも勘定の内、身代へかゝるわい。モシ、こなさん、聞けば與五郎を尋ねさんすが、何の用ぢや。

儲け口なら、わしに云はんせ〳〵。

次兵　イエ〳〵、別して左樣な儀でもござりませぬが、私しは吉原の藤屋と申す茶屋でござりまするが、先達て内の抱への吾妻と申す藝者を、爰の與五郎さまから、身請け金のうち百兩受取り、跡金二百兩參りますれば、早速吾妻をお渡し申しまするが、今以て御沙汰がないゆゑ、それゆゑ參つたのでござりまする。

淨閑　何ぢや、吾妻とやらを身請けするとて、三百兩にきめて、跡金二百兩を取りにござつたのか。

次兵　左樣でござります。

淨閑　默らつしやい。

次兵　ハイ〳〵。

淨閑　この身代は、あの與五郎に讓りくれいと、死なれた旦那の遺言ゆゑ、おれが實の子の與次兵衛にも家をやらず、養子嫁まで貰うて置けど、不埒者の與五郎。その上實子の與次兵衛も、親の氣に違うて家出して居たゆゑに、隱居のわしが附け鬢して、元へ歸つてお屋敷の勤め。講中の衆が挨拶で、やう〳〵内へ呼び戻した悴め。實の子でさへ容赦はせぬに、家附きなれど他人同然の與五郎、なんで二分も出すものぢや。さう心得てござれ。

次兵　へイ〳〵、左様なら、いづれとも仕りませうが、それでは手附けの百兩が流れに相成りまする
が。

ト淨閑これを聞き

淨閑　コレ〳〵、待たつしやい〳〵。百兩の手附けが流れる。アノ百兩が
ト思ひ入れあつて
流れるなら相談ものぢや。その手附けを取こんで、跡金やつて、わしが身請けせう。

次兵　エヽ、アノおまへ様が

權九　吾妻の身請けをなされるか。

淨閑　コレ權九郎、聞けば吾妻には、あの倉岡どのが惚れてござるといふ噂。

權九　成る程さやう。大金出して身請けをなされ、丈左衛門さまへ遣はしたら、まだ此うへに、あなた
のお願ひ。

淨閑　サ、そこがあるゆゑ、つないで置くは

權九　與五郎さまの手附けの百兩、散らさぬ勘定。

次兵　イヤモウ、外のお内へやるではなし。お内へならば、その證文で遣はしませう。

淨閑　そんなら、何かはゆるりと相談。

權九　小揚げの衆も莨にさんせ。

九郎　一服やらうか。

七　モシ、旦那、松魚は爰へ置きますろぞえ。

淨閑　錢は晦日に取りにごんせ。コレ善太、鉢を持つて來い。

善太　アイ〳〵。

次兵　左様なら御勝手で、ドリヤお待ち申しませう。
ト唄になり、次兵衛、百介、九郎八、七、のれん口へ入る。善太、大鉢を持つて來る。淨閑、松魚を
こしらへる。この唄をかり、向うより仁右衛門、町人、門徒肩衣を着たる形、市兵衛、孫六、町人に
て、門徒肩衣を着て、珠數をつまぐり出る。跡より與次兵衛、羽織、一本ざし。供の男、袱紗包みを持
ち、お寄り講の歸り。妙貞、後家のこしらへ、黒紹のお角隠しをかむり、珠數をつまぐり出で來り、花
道にて

與次　これはどなたも、御苦勞でござりました。

仁右　イヤモウ、世話いたした甲斐がござつて、めでたうござります。

妙貞　今日のお寄りに、與次兵衛さまのお顔が出たので、講中も安堵いたしましたわいの。

市兵　この後とも與次兵衛どの、親御に氣を揉ませぬやう。

孫六　氣を附けさつしやりませ。

與次　御講中のお執成し、何かと忝なうござります。

仁右　親仁どのも待かねてゞござらう。サア、參りませう。

與次　左樣ならば。

ト唄の切れにて皆々本舞臺へ來る。

權九　モシ旦那え。御講中がお出でゞござります。

淨閑　これは〳〵仁右衛門どの、イヤ、妙貞どのも、どなたも、マア〳〵、あちらへ〳〵。

ト手を拭きながら出迎へる。

皆々　お許しなされませ。

ト内へ入る。

權九　これはどなたも、ようお出でなされました。與次兵衛さま、お歸りなされましたか。

與次　オ、權九郎か。段々と仁右衛門さまのお世話をもつて、宿老どのにもお目にかゝり、山崎屋跡式相違なく讓りうけ、家相續いたすやうにと、町内の連印相濟み、禮云うて歸り申したて。

權九　それはおめでたうござりまする。

仁右　これと申すも與次兵衛どのが、一體町内の衆に惡う思はれぬゆゑ、先祖與次兵衛どのゝ讓り狀と、相違いたしてあれど、そこを兎やかう申す者もござらぬて。して、二男の與五郎どのは、どれへぞ行かれましたかな。

淨閑　イヤモウ、あの與五郎には困り果てまする。云はゞ死なれたる親旦那の實子、わしはその節番頭上がり、のれん貰うて小見世を出し、女房持つて、それに出來たはこの與次兵衛。その時の名は三之助。產後に嚊めは病死して、親子二人で暮らすうち、爰のお家の御新造も御病死。その時乳のみのあの與五郎、殊に旦那は御病身、枕の許へわしを招き、どうで今度は助かるまい。おれが死んだら、われが身代片づけて、この家の跡を踏まへ、山崎屋を立てゝくれい、代々鴻野の屋敷へお出入り、有り金は十萬兩、他人のわれに遺るほどに、悴の與五郎我が子にして、其方が悴は兄に立て、主家來ぢやとて、分け隔ては決して無用。併し末々この家を與五郎めに、やつてくれと頼みはあれど、この頃のあの不身持ちを。

與次　サ、その御先祖の御遺言を、小耳に覺えし私しゆゑ、兄とはいへど末々は、弟に山崎の家つがせ

んと思ふうち、親仁さまの氣に違ひ、暫く内を遠ざかり罷り在るうち、弟が不身持ち、屋敷の勤め、彼れこれに、御隱居なされた淨閑さま、附け鬢なされて以前の與次兵衛、男形にて屋敷の手前、御苦勞なさるが氣の毒さ、仁右衛門さまのお世話にて立歸つた私し、御町内の披露目も濟めば、直ぐに今日只今より、家の跡目は卽ち私し、弟が事はまた追つて、惡いやうにも致しまい。

仁右 さやう〳〵、何をいふのも家の爲め。あの與五郎どのも、藝者狂ひの惡心やんだなら、ハテ、身代は二つ分け、出見世出しても世間は濟みます。殊に在り金は十萬兩、嫁御も貰うてあるといひ、この上の事はござらぬて。

淨閑 サ、その貰うて置いた嫁の照は、鴻野の家中、橋本次部右衛門といふお方の娘、これも實の娘でもないとの事。

權九 その次部衛さまも、今ではお屋敷をお暇、浪人なされて、橋場の邊にお出での樣子、マア何事もさて置きまして、仁右衛門御宿老御町内にも、御總領に跡式をお讓りなさるを、御承知でござりまするかな。

妙貞 ハテ、そりやモウ、女でこそあれ、この妙貞が證人でござんす。なう、皆さん、さうぢやござんせぬか。

市兵 さやう〳〵、御子息與次兵衛さまに山崎屋を讓られても、町内に一人でも不承知なものはござらぬて。

孫六 斯う物が極まつたからは、早う跡式の讓り引、與次兵衛どのにも、早う落ちつかせるがようござるわいの。

淨閑 左樣ござらば仁右衛門どの、この親仁が身代を、與次兵衛に讓るといふ慥かな證據は、印形より書ものより、コレ、これが慥かな證據でござるわいの。

ト附け髭、附け鬢を取り、坊主頭になり、

ソレ、仁右衛門どの、この髮お前に渡しまするぞ。

ト附け鬢を仁右衛門へ投げてやる。

仁右 イヤモウ、これてわしも安堵しました。コレ、コレ與次兵衛どの、親仁どのは、この通り、今日からは在り金の十萬兩、家屋敷も大切に、必ず親御の恩を忘れさつしやるなよ。

ト附け鬢を渡す。與次兵衛取つて

與次 何から何まであなた方のお世話。大身代の山崎屋、私しが踏まへまする上からは、萬事に心をつ

けまして、家の榮えが先祖へ孝道。いづれも様、親仁様、有り難う存じまする。

ト附け鬢を戴き

この上ながら與五郎が身の納まり。別家なりとも。

仁右　ハテ、何事も又わしが、よい思案がござるて。

妙貞　イヤモウ、これで安堵しました。仁右衛門さんもお前方も、跡へ殘つて讓り引の立合ひ。わたしや女の事、居たというて役には立たぬ。もうお暇しませうわいなア。

與次　ハテマア、わざと御酒なりと。

妙貞　イエ〳〵、わたしや大の下戸、お杯ならお預けぢや。追つて何なとねだりませう。

淨閑　それ〳〵、人にもの振舞ふは、頭數の少ないが勝手ぢやて。

市孫　ハテ、金持ちはあの通りぢや。

淨閑　然らば仁右衛門どの、御苦勞ながら。

仁右　ドリヤ、御相談仕らうか。

權九　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、仁右衛門、市兵衛、孫六、淨閑、權九郎、奥へ入る。與次兵衛殘る。妙貞向うへかゝる。

揚げ幕より與五郎出で來る。跡より下駄の市、やつしの形、夜番にて、與五郎に付き出で來り、花道にて妙貞は摺れ違うて向うへ入る。

市　モシ〳〵、與五郎さんえ。又お前俄かえ。モシ、いゝ加減になされませ。しはん坊の大旦那が、大抵な事ぢやアあるまいに、ちつと内にござりませな。

與五　なにサ、おらア昨夜から友達の所に、謠ひ講があつて、そこへ泊つて今歸りがけよ。

市　エヽ、謠ひ講かえ。謠ひ講やら、念佛講やら、御精が出ますね。與次兵衛さんが宿老へござつたが、大方跡目は與次兵衛さんが

與五　アヽ、戻つて居らるゝか。それは重疊、逢うてこの身の

ト思ひ入れあり

サ、市ばう、來やれ。

ト唄になり、兩人門口へ來て内へ入る。

市　モシ、お見世の衆え、若旦那がお歸りだよ。

與次　オヽ、與五郎か、いま戻つてか。

與五　ハイ、友達どもに誘はれまして

與次　俄はどうぢやな。

與五　イエ、謠ひ講へ參りました。

與次　それは珍らしいの……コリヤ、誰れも居らぬか。女子どもは居らぬか。與五郎が戻つた。ふだん着を持つて來やいの。

てる　ハイ、畏まりました。

ト合ひ方になり、振り袖のお照、與五郎が着替へを持ち、のれん口より出で來り

只今お戻りなされましたか。サ、御ふだん召しを。

與五　オ、、お照どの、下女のりくが居やうに、これは手づから、戴きます。マア〳〵、そこへ置いて下さりませ。

市　ア、、お照さんかえ。モシ、わつちやア今、道でお目にかゝつたから、お連れ申しやした。晝のうちはいゝが、夜に入ると物騷でござりやす。必ず一人で出し申しなさるなよ。

てる　サ、わたしも左樣思つてゐれど、いつの間にやら與五郎さまのお一人歩き、いかうお案じ申しまするわいなア。

與五　なんの案じる事があつて。其やうに科もない者を、誰れが滅多に

市　イエ〳〵、さうでござりやせぬよ。お話しは長い事だが、わつちが親仁も、人に切られやした。

與五　ア、、てまへの親は人に切られたか。

與次　して、そりやアいつの事だ。

市　なにサ、そりやアわしが餓鬼の時のお話しサ。お聞きなされませ。譯は存じませぬが、わしの親仁は、足駄の齒入れでござりました。

與次　ア、、親仁は足駄の齒入れか。

市　ハイ、左樣でござります。足駄の齒入れで、岩淵の權助と申しました。足駄の齒入れの御子息ゆゑ、そこでわしが異名が下駄の市サ。

與五　エ、、そこでおぬしが下駄の市。

市　左樣サ、親仁が切られたその時分は、まだ跡先わきまへもなき水子同然。併し餘ッほど小胸が惡い、わしが親仁といふ噂。向うの相手は關取株、白藤といふ角力取りに、割下水で切られました。その權助が實の息子。併し町人の悲しさには、敵討に出られもせず、いづれも樣のお取立でどうぞ一度は足駄の齒入れになりたいが願ひ。薄ぎたない商賣でも、親仁の職ならその筈の事でもあり、與次兵衛さまのお世話にて、川岸の土藏の寮ずの番。アヽコレ、話すうちにも、流石は

親子だ、親仁が非道に死んだと思やア、心細くなるやつサ。

てる　エヽ、そんならこなさんの父さんは、アノ、人に切られて。

市　アイ、それだによつてお氣をお附けなされませ。昨夜も吉原田圃にて、鷲の長吉といふ者が、切られて死んだといふ噂。

與次　ヤア、田圃でか。

市　アイ、相手は誰れか知らねえが、その長吉が死骸の側に、切れた小指が落ちてあつたで、小指の切れた其ものが、人殺しの科人と、町中はきびしい詮議サ。

ト これにて與五郎思ひ入れあつて

與五　すりやアノ、鷲の長吉が、切られた場所に小指が落ちて。小指がなければ人殺しの

ト はつと思ひ入れ。與次兵衛何心なく與五郎が小指の切れしなフト見つけ、惝りして顔見合せ

與次　アノ、小指のないが人殺し。

與五　エ。

ト こなし。

與次　ハテ、物騒な事ぢやなう。

ト 思ひ入れ。唄になり、向うより次部右衛門、羽織袴大小にて、老けたる拵へ、中間一人連れ出で來り、直ぐに門口へ來り

次部　橋本次部右衛門でござる。主には御在宿かな。

與次　これは次部右衛門さま、マア〳〵これへ。

次部　免さつしやりませ。

ト 上へ通る。

てる　父さん、ようお出でなされました。

次部　オヽ、これは娘照か。與五郎もこれにお居やるし、見ますれば、總領の與次兵衛どの、この程は他行いたし居られしと承つたが、アヽ、いつお歸りでござるな。

與次　ヘイ、昨日講中の世話をもちまして

次部　歸りめされたか。それは重疊……コリヤ娘、お茶一つ所望いたさう。

てる　アイ〳〵、私しが

與五　アヽコレ、氣の附かぬ。お茶を持たぬかえ、

ト 奥より善太、茶を汲み出で來り

善太　ヘイ、お茶を上がりませ。

ト差出し、お照を見て

オヽ、お照さま、とんと忘れて居りましたが、先ほど小間物屋の清七どのが、この間中お誂への七寶つなぎの櫛が出來ましたと申して、私しへ預けて參りましたが、サア、御覽じませ、なんと好く出來たではござりませぬか。

ト蒔繪七寶つなぎの黑の木櫛、紙に包みたるを出す。お照取つて差し、善太見て

善太　こりや、ようお似合ひなされました。

與五　サア、七寶つなぎとは。

ト見て

そりや慥か、わしが替へ紋を

ト お照と顔見合せ、ちよつとこなしあつて

これはハヤ、次部右衞門さま、あなた樣には御用ばしござりまして、お出でゞござりまするかな。

次部　いかにも、身共參つたるは別儀でもござらぬ。知らるゝ通り、實子なき身共、女房めが存生の間十次兵衞の末の妹、この照めを養女に致したところ、母めは病死。その後身共はお暇たまはり、

浪人仕り、最早二君に仕へまする所存なきゆゑ、照めを與五郎へ養子嫁、次部右衞門一代にて朽ち果てんと存じ居つたところ、又ぞろ古主よりお尋ねござつて、召歸されて以前の如く、劍術御師範仕れと、役人中より支度の金子、二百金拜借仕つてござる。卽ちこれへ金子持參仕つたは、拙者貯へあつて益なき金子、娘照めが何なりと、望みの品がござるなら、調のへて遣はされませ。その儀を賴まん爲ばかり。サ、この金子、お預かりなされて下されい。

ト財布入りの封金の二百兩を懷中より出し、差置く。

與次　左樣ならば、この金子を申しうけ、アノお照に

次部　頭の道具、何なりと、よろしう賴み存じまする。

ト思ひ入れ。この時奥より次兵衞出で來り

次兵　與五郎さま、お歸りでござりまするか。早速申しませうが、吾妻が跡金二百兩の儀を

ト云はうとする。與五郎せいて

與五　これはしたり〳〵、爰では惡い。サア、何事もナ、後方までにナ、エヽコレ、氣轉のきかぬ。

ト いろ〳〵思ひ入れ。お照もさてはとこなし。

市　コレサ、藤屋の親方、こなさんも粹な商賣する程にもない。吾妻々々と、吾妻とは、アヽ何か、

おれを東ッ子といふ事か。東ッ子どころか、おらァ交りなしの江戸ッ子よ。

興次　いかさまナウ、吾妻とやら何とやら、その金高も二百兩。次部右衞門さまの御持參ありしも二百兩。ハテ、割符を合す。

ト金を仕舞はうとする。

次部　アイヤ、總領どの、待ちめされい。承れば、貴公には別宅おしやり、與五郎ことは未だお屋敷お目見えなき部屋住み、それゆゑにこそ淨閑どのが、附け髷して、お上の御用聞きめさると承つたが、すりや、與次兵衞どのには立歸つて

與次　山崎屋の跡式は、今日只今私しめが讓りうけ、親仁樣はこれまでの通り隱居、卽ち山崎屋與次兵衞と、町内へも披露いたしまして。

ト與五郎お照思ひ入れ。

次部　すりや、跡式は其許が踏まへ、娘を進上いたしたるあの與五郎は、現在家つぎ、紛れなき親身でござれど。

與次　サ、その儀は存じて居りまする。御先祖の血のあまり、跡式踏まへる御身分でも、ハテ、山崎屋の家には易へられませぬ。

與五　家に易へぬと兄貴の詞。この身の不埒が募りては、親身たりとも遠慮なう。

與次　イヤ、勘當は仕らぬ。

與五　アノ私しをえ。

トこなし。

てる　何ぢややら與五郎さんの身に取つて、もし間違うた事あらば

ト思ひ入れ。

市　エ、、小焦れつてえ、もつれた身代。これを思へば金持ちより、貧乏人が、はるかましかえ。

次兵　身請けの跡金出來ませずば、大旦那のお世話にて、吾妻はお屋敷倉岡さまへ。

次部　ナニ倉岡とは、御家中にて、底意の知れぬと噂ある。

與五　丈左衞門へ御隱居が、身請けのお世話を。

ト思ひ入れ。よき時分より淨閑出かゝり居て

淨閑　イヤ、跡金二百兩、わしが渡して身請けする。

ト合ひ方。

次部　こりや主には以前の如く、法體あつて淨閑どの。こりや斯うなけりや叶ふまい。

淨閑　一別以來次部右さま、お恥かしいが只今の、吾妻が身請けは則ち我れら。ハテ、手かけ妾もござらねば、この淨閑が請け出して、朝夕寐間の上げ下ろし、腰膝揉まする。コレ、與五郎、その時兎やかう云ふまいぞ。

與五　親仁様のなさる事、ナニ部屋住みの私しが。

ト思ひ入れ。

市　併しこれまで若旦那も、多くの金を……アイヤ、先約なれば與五郎さんに、親方は義理があるといふもの。マア、何事も、二三日待つて進ぜさつしやい。

次兵　お馴染みだけに、明後日まで。御隱居様もその通り、明後日急度御返事。

市　わしも番屋の古行燈、油の掃除にかゝらうか。

次兵　左様ならば若旦那、何分よろしう。

ト思ひ入れ。與五郎氣の毒なるこなし。

市　ハテマア、ござれな。

次兵　ハイ、お暇申しませう。

市　ドリヤ、行燈掃除にかゝらうか。

ト合ひ方になり、次兵衛は向うへ、下駄の市、門口の番屋へ入る。淨閑、二百兩の金を見て

淨閑　コレ、與次兵衛、財布入りの、その金は。

與次　ハイ、この金は次部右衛門さまより、此お照どのへ、櫛簪なと求めよと、お心ざしのこの金子

淨閑　ハテ、それはお照は仕合せな。ドレ、わしが預かりませう。

ト取らうとする。與次兵衛さゝへて

與次　アイヤ、この金子は其まゝに、コレ、お照どの、其方の手箱の内へなりと。

てるイエ〳〵、それではどうやら我もの顔な致し方。矢張りお内の金簞笥へ、お仕舞ひなされて下さりませ。

與次　成る程、用心も悪からう。小間物屋の見えるまで、わしが預かりませう。今にもいらば、あの戸棚の内へ。コレ、其方、仕舞うてござれサ。

てるアイ。

ト戸棚を明け、金簞笥へ仕舞ふ。淨閑、ぢろ〳〵見て

淨閑　ハテ、惜しい金を、小間物屋に取らるゝとは、エヽ、世は様々なものぢやなア。

次部　淨閑どの、ちとお目にかゝりたうござる。

淨閑　アノ、わしに。
次部　いかにも。
　　トよろしく住ふ。與次兵衛見て
與次　コレ、お照どの、親御樣が何やらお話しもある樣子。其方は奥へ。
てる　アイ。
　　トうぢ〳〵して
　　何ぢややら、心がゝりな父さんの御樣子。殊に大枚二百兩、わざ〳〵お持ち遊ばして
　　ト思はず與五郎と顏見合せる。
與五　ハテマア、奥へ。
てる　アイ。
　　ト合ひ方になり、お照、心を殘し、奥へ入る。
淨閑　次部右衞門さま、して、御用の筋はな。
次部　イヤ、別儀でもござらぬが、貴公御實子の、これに居らるゝ與次兵衛どのが、跡式を納め召さるれば、誠に與五郎は無うても濟みまする。して、身共が娘と與五郎は、いかゞ致さるゝ存じ寄りでござるな。
淨閑　別して存じ寄りもござらぬが、お聞きの通り、藝者狂ひに大金を費す與五郎、親方筋でござらうが、家に易へぬが年寄りの片意地、事と品とによりますれば
　　トあと云ひかれる思ひ入れ。
次郎　そりやモウ、親といふ字のついた其許、よしや勘當いたされても
與五　エ。
次部　サ、與五郎方に申し分はござりますまいが、貴殿へ養女に遣はした、娘照めが身分は、どこで立ちまする。サ、そこがとつくり御思案どころ、親子の衆、何と思し召さるゝ、
與次　こりやハヤ、御尤ものお尋ねでござりますが、何を申すも、爰に聞いて居りまするが、吾妻と申す藝者に迷うて
次部　アイヤ、そりや若い時には、誰れしも有る儀でござる。いはゞ娘を進ぜた拙者、此方より何とやら申す筈なれど、そこを申さぬが當世とやら承る。與五郎ばかりか、まだ外に、藝者狂ひを致さるゝ人もござるサ。それ式ならば何事も
　　ト思ひ入れ。

與次 こりや改まつた次部右さま。外に藝者に狂ひ居るものがござると、仰しやらぬばかりのお詞。この與次兵衛も、物堅き親仁樣への氣がねして、女房氣のない男ゆゑ、圍ひ女房隱し妻、致したともそれ程に。

ト少しむつとする。與五郎立寄つて

與五 サ、御尤もでございます。何を申すも、みな與五郎が身持ちが惡さに……私しが惡うございます。斯樣な事が云ひつのり、ひよつと間違ひ出來ましては、私しが迷惑仕ります。サ、何事もお構ひなう、次部右衛門さま、奥にてお禮に粗酒一つ。兄貴よろしく御馳走たのみまする。

淨閑 イカサマ、折角お出での次部右さま、云ひつのつては跡の後悔。そんならわしが、隱居家々々々

次部 御馳走になりませうか。何を申すも娘が可愛さ。

與次 サ、其お心は與次兵衛が、よう汲みわけて居ります。

次部 與次兵衛どの

與次 次部右衛門さま

淨閑 斯うござりませ。

ト唄になり、淨閑先に次部右衛門、與次兵衛ついて奥へ入る。與五郎殘る。

與五 日頃から、かたましい親仁樣。それに引かへ、次部右衛門さまのお心ざし。お照が髪の飾りなと買うてもらへと、二包み御持參ありしも、與五郎が金に詰まりし二百兩。情のほどは詞にも、云ふに云はれぬあのしだら。吾妻が兄の長吉を、殺した科は、今の間に召捕らるれば、云ひ譯ないは小指。

ト思ひ入れ。よき時分よりお照出かゝり居て

てる エヽ。

ト驚く。與五郎もこなしあつて

與五 こりやお照どの。こなたは爰に。

てる アイ、與五郎さま、そりやお前、聞えませぬわいな。

與五 そりやアなんで與五郎が。

てる サア、お前とわたしは云ひ號けゆゑ、まだ杯はせぬけれど、貰はれて來て養子嫁、今に女夫とならぬのも、かたましい淨閑さま、御實子の與次兵衛さまに家をつがせ、もしもの事がある時は、お前さんを此お家に、お置き申さぬ相談も、あの權九郎と度々の事ぢやわいな。親御樣に其お心がござりましては、お前のお身が立ちますまい。幸ひ先刻に父さんが、お持ちなされた二百兩、

あの金で吾妻さんの身請けして、どうぞお前は爰にお出でなさんすやうに、與次兵衛さまへ譯云うて、山崎屋の跡を納め、お内儀さんは吾妻さん。その時わたしや物縫ひとも、針妙とも思し召して、どうぞお内に置いて下さりませ。もし父さんがその節に、去り狀取らうと仰しやつても、どうぞ書いて下さんすなえ。お前と緣を切る事は、否でございます〳〵わいな。

ト縋りついて思ひ入れ。

與五　コレ〳〵、お照どの、その心ざしは忝なうござる。一生この身に恩に着る。併し不身持ちな與五郎、所詮山崎屋の跡式は思ひもよらぬ。勘當うけて流浪する、科は遁れぬ事ながら、科ないこなたに苦勞をかけては、次部右衛門さまへ、どうも申し譯がない程に、ふッつりおれが事、思ひ切つてはくれまいか。

てる　すりや、どのやうに申しても、吾妻さんに心が殘り、わたしを緣切るお心かいな。與五郎さん、そりや聞えませぬ〳〵。

與五　コレ〳〵〳〵、なんの吾妻に心が殘らう。モウ〳〵、モウ〳〵身請けもせぬ。ハテ、今聞く通り、親仁樣が身請けして、妾手かけになさる吾妻。忰のこの身で、どうして親の

てる　サア、あゝ仰しやれどなか〳〵に、御隱居樣が、どうして大金右左り、出して身請けをなされませう。ありや決して、嘘ぢやわいな〳〵。

ト この時與次兵衛出かゝりゐる。

與五　サ、さは思へども、みす〳〵親の

與次　心にたがはゞ不孝の上塗り。

與五　ヤ、お前は兄貴、與次兵衛どの。

てる　與五郎さまを御不孝とは。

與次　ハテ、みす〳〵僞はり事ながら、親の手かけに抱へる吾妻、子としてよもや身請けもなるまい。その身のもや〳〵思ふなら、モウこの内を

與五　エ。

與次　家出をしやれ。ハテ、うか〳〵この家に居やつては、惡い噂の弟與五郎、この跡式も何もかも、隱居の自由にさせぬが與次兵衛。この程俄の歸りがけ、土手で頓死か急病か、ぶち殺しても死にそもない、あの長吉が

與五　エ。すりやあの場所へ。

ト思ひ入れ。

與次 サ、それぢやによつて遠ざかり、暫く影を隱すのが、よささうなものぢやぞよ。

與五 すりや、私しは暫くこの身を

與次 隱れ忍ぶは、其方の乳母が娘のお賤は、髮結ひの世渡り、爰を賴んで少しの間。

てる そんならわたしも御一緒に

與五 アコレ、どうしてこなたを連れられやう。

てる イエ〳〵、わたしやお前と共に

ト左の手を取る。

與五 アイタ、、、、、

ト指の痛む思ひ入れ。

てる これやコレ左の

與五 指は吾妻へ

てる アノ、心中に。

ト思ひ入れ。

與次 サ、それゆゑ影を隱すがよからう。

與五 情のお詞、爰から直ぐに

與次 氣遣はずとも

與五 兄貴。

與次 與五郎、早う。

てる どうぞわたしも。

與次 行きやれ。

ト行かうとするを、與次兵衞へだて〻、與五郎を突き出し、門の戸をしやんとさす。唄、七ツの鐘

與五郎向うへ走り入る。引ちがへ揚け幕より四ツ手駕籠の垂れを下ろし、妙貞附いて、すた〳〵と出で來り、駕籠は門口へ下ろし、妙貞囁く。駕籠舁き呑みこんで下手へ入る。跡合ひ方。

てる コレイナア、與五郎さん、どうぞわたしも、ござんす所へ。

與次 これはしたり、其方は他家より貰うた娘、與五郎が家出したとて、どうして一緒にやられうぞ。

マア〳〵、わし次第に。

てる して、與五郎さんは、ありやマア、どこへ行かんしたのぢやえ。

與次 ハテ、内に置けば親御の心に違ふといひ、殊に家附きの與五郎、勘當しては世間の手前、與次兵

衞が立たぬ。そこで首尾よう目論んで家出さすれば、親を捨て家出の悴、どうでお帳につけねば
ならぬ。

てる　エヽ、アノ、與五郎さんをお帳とやらに、お附けなされますのかえ。

與次　ハテ、我れと我が身を自滅の與五郎、毛蟲親仁も隱居させ、この跡式は枕を高う與次兵衞が
あるアノ、この山崎屋の身代は、

與次　總領ぢやもの、納めいで。弟與五郎日蔭者、嫁に貰うた其方をば、コレ、この兄が女房に持つ。

てる　エヽ、そりやマアお前、眞實かえ。

與次　杯もせぬ弟嫁、殊に世間へ廣めはせず、兄が女房に持つたとて、なんの大事が

てる　ィエ〳〵、わたしも武家の娘、左樣な約束いたしませぬ。杯せねど云ひ號け、與五郎さんがござ
んせにや、わたしやお内に居りませぬ。

與次　イヤ〳〵、さうは云はれまい。たつた今もこの内を出る事は、否でござると云うたぢやないか。
弟は身より出たる錆、其方に何の科はない。料簡し替へてわしが女房に

てる　ィエ〳〵〳〵、道に背きし夫は、どうしても持ちませぬ。

與次　そこを我れらが持たせて見せう。

てる　どうしてあなたに

ト逃げんとする。立廻りあつて、見世にあつたる魚を拵へる出刃を取上げ、手早く我が手に左の小指
を切る。お照悔りする。合ひ方。この時門口の駕籠の垂れを上げる。内に都、藝者の形にて窺ひ居る。
上の障子を明けかけ、次部右衞門窺ひゐる。與次兵衞思ひ入れあつて

與次　コレ、お照、あの與五郎は吾妻への心中なりと、左の小指切つてゐるを、いま爰で其方は、あれ
ほど見たではないか。わしは其方へ心中の、指を切つたが固めの印し。返事さつしやれ。

てる　エ。

與次　心中見せても男に持たぬか。

てる　サアそれは。

與次　女房になるか。

てる　サア。

てる　サア〳〵〳〵。

與次　お照、切つたこの指、必ず無駄には。

ト振りかへる拍子に次部右衞門と顔見合す。次部右衞門、障子ぴつしやり閉す。與次兵衞思ひ入れ。外

より都と妙貞、ツカ〳〵と入り、與次兵衛が胸づくしを取つて思ひ入れ。權九郎出かゝつて窺ふ。

みや　コレ、惡性男の與次兵衛さん。

與次　ヤ、わりや都、なめらさんぼう。

妙貞　外からしつかり見屆けました。エ、、こなさんは

與次　これは阿母、尤も〳〵。

みや　イエ、イエその尤もは、もう〳〵聞きたうござんせぬ。其方についた身の代の金は、如何ほどあるとても、立金はわしがして、女房にするゆゑ、今日爰へ同道せいとのお賴みに、母さんと相談して、門には親子が居るとも知らず

妙貞　與五郎さんの云ひ號けのお照さんに、指を切つての惡口說き。コレ、與次兵衛さん、お前アノわたしが娘、都が事はどうさんす。お前を爰の代取りにせうと、宿老どのまで駈けあるき、骨を折つたも娘を爰の、御新造樣にしたいが山。向うの見えぬにうか〳〵と、世話やくやうな妙貞ぢやござんせぬ。サ、山崎屋の御新造樣は、娘の都ぢや。さう思つてもらひませう。エ、、アタ阿房らしい。

てる　ほんにお前は慥か講中

妙貞　アイ、妙貞でござんす。わしが娘は藝者の都、とうから主の圍ひ者、今日改めて山崎屋の御新造、わしや姑御さんぢや。アイ、大身代の阿母樣ぢや。さう思うて下さんせ。

てる　そんなら都さんは、與次兵衛さんの

與次　アヽ、コレ〳〵、もう〳〵何も云うてくれな。立派顏したこの與次兵衛、面目次第も

權九　イヤ、無いとは云はさぬ。堅い顏する兄御樣、イヤハヤ呆れた身持ちだわえ。與五郎どのは吾妻へ打こみ、手附けは濟んでも、跡金の二百兩に行きつまり、身請けの出來ぬを附けこんで、御隱居樣が、百兩安いと聞くと其まゝ、拂ひ物なら買ふべしと、吾妻を手かけに抱へる心。兄貴は都を引摺りこみ、それが足らいでお照さまに足をつけ、指を切るとは言語道斷。有やうは與五郎どのをほいまくり、お照さまを申しうけ、別家と成つて見世でも出してもらはうと、樂んで居るこの權九郎が手前も恥ぢず、あまり不埒な與次兵衛どの。イヤハヤ、爰の內に、ろくな奴は一人もない。モシ、お照さま、只今から、私しへ〳〵。

トしなだれ寄る。

てる　エヽ、何ぢやそいな。其方までが同じやうに。こゝ放しやいなう。

トふり切り、ツイと奥へ入る。

妙貞　サア〳〵、娘、聞けば聞くほど油斷のならぬ爰の内。モウ〳〵、ちよつとも待たれぬ。われも早う與次兵衛さんから、身の代の百兩いま取つて、わしに寄越しや。サア、早うしや〳〵。サア、立て金して、女房にさんせ〳〵。

與次　これはしたり、マア〳〵、靜かに云うてくれい。

權九　コレ〳〵、都さん、おまへ藝者の身で、生娘に見かへられては立ちやすまい。お前も面あてに指を切りなさい。心中しなさい。コレ〳〵〳〵

ト出刃を取つて來り

サ、この出刃で、指を切りねえ〳〵。

みや　エヽ、滅相な。どうしてわたしが。

妙貞　さうぢや〳〵。滅多に娘を疵物にはさせませぬ。

權九　エヽ、卑怯な事を云ふ阿母だ。指の切りやう知らずば、わしが敎へて進ぜう。マア、この出刃を斯う持つて、コレ、ちよつきりちよつと出刃を斯う持つて、左の小指と見たならば、右に持つた庖丁で、まッこの通り

ト思はず我が手に指を切り、「ワッ」と倒るゝ。皆々驚く。

みや　ソレ、いつそ血が流れるわいな。

妙貞　どうでも今が汐時であらう。

權九　アヽ、痛い〳〵〳〵。コレ、お照さま、血留を下さりませ。血留はどこにある。どこだ。堀留は近所だが、汐留は遠いワ。

ト「痛い〳〵」と手を抱へ、奥へ入る。

みや　コレ、與次兵衛さん、あのお照さんへ切らしやんした心中は、ありや、ほんまでござんすかいな。

與次　何をマア、わけもない。身請けせうと呼び寄せた、其方は女房、ありや正眞の座興といふもの。コレ、この切り指はわがみへ心中。

ト小指を取つてやる。

みや　すりや、わたしへお前が心中。

與次　切つた小指が夫婦の固め。

妙貞　そんなら娘と、いよ〳〵祝言。

トこの時奥より

仁右　千秋萬歲の千鶴の玉を奉る。

市孫　ア、、めでたい〳〵。

ト肩衣のまゝ仁右衛門、銚子杯を持ち、市兵衛、孫六出で來り

仁右　サ、お二人の固めの杯、都さまから與次兵衛さまへ。幸ひ我れら講中の、この肩衣の役に立つた

る仲人役、跡式何かの讓り引、親御が得心いたされて、又ぞろ二度の法體で

市兵　もの事丸う頭の如く、事納めた上からは、わしが勘定吳服代、都どの、身のまはり、積つたとこ

ろが五十五兩の三分二朱。

孫六　さて小間物屋〳〵め高が、四十三兩二分あまり。

妙貞　娘が立て金百兩と

與次　合せて僅か二百兩には足らず。ドレ、勘定して

ト戸棚を明け、金箱を取出し、明けようとする。此うち淨閑、障子屋體に出かゝり、この體を見て膽

をつぶし、この時つか〳〵と出で、明けんとする金箱を押へ

淨閑　どつこい〳〵、さうはさせぬぞ。マア〳〵〳〵、どこの國にか、この親が爪へ火ともしたと

いはうか、旨い物を食ふや食はず、十萬兩の在り金の、まだ其上へ貯めた金、湯水のやうに遣ふ

とは、さうはさせぬぞ。與五郎めはあの不埒、實の子の偏屈者、われが斯うした心とは、今の今

まで知らぬわい。ヤイ〳〵、此マア同行の仁右衛門どの、こなた衆まで同じやうに、藝者を引込

み、親にも沙汰なし祝言沙汰、吳服代も小間物の金も、やること親がならぬ。一文きなかも、な

らぬぞ〳〵。

ト千兩箱へ跨り、押へて居る。

仁右　これはしたり淨閑どの、こなた、老耄さしつたか。

淨閑　なんで淨閑、老耄いたさぬ。

仁右　ハテ、それでもこなたは身代を、あの與次兵衛へ讓つたではござらぬか。

與次　その上お前は、元へ戻つて樂隱居、この山崎屋はわしがもの。十萬兩の金のうち、二箱三箱違う

たとて、別して痛まぬこの身代。お前は御隱居、かくれゐる文字の通りに、どこぞへ隱れてござ

りませ。

淨閑　エ、マア、おのれは

與次　ハテ、わしが物でござります。

ト淨閑を突きのけ、箱の内よりみだけ二包み出し

ソレ、よいやうに分け取〳〵。

妙貞　エ、、忝い。

ト金を取つて

コレ〳〵、跡は差詰めお前がた、よいやうに、分けさんせ。わたしや百兩取つたその上に、山崎屋の姑御樣ぢや。ホ、、、、、……ソレ、お前方、よいやうに。

ト百兩渡す。

市兵、オット、此方の勘定も……二口〆めて百兩あまり。

孫六　二人は慥かに受取りました。

仁右　コレ〳〵、都どの、あなたは爰の御隱居ぢや。行く末の事、賴まつしやれ〳〵。

みや　そんならあなたは舅御樣。この上ともに嫁のわたし、お氣に入らずと御隱居樣、實の娘と思しめし。

ト思ひ入れ。

淨閑　エ、、知らぬわい。

ト腹立てる。

妙貞　內祝言は奥座敷。わしや開いてから跡の片付け。ナウ、與次兵衛さん……アイヤ、さんぢやない

與次兵衛どの、わしや姑御ぢや。孝行しなさんせえ。

仁右　然らば講中、宵のほど、日暮れぬ內に開きませうか。

ト皆々門口へ出かゝる。

與次　これはどなたも、何かと御苦勞。明日お禮に

市孫　イヤモウ、それには及びませぬ。

與次　さて金箱も不用心。ドリヤ、錠前をぴんとおろして。

ト又び錠おろす。

淨閑　ドレ、その鍵を

ト與次兵衛が腰の鍵を取りにかゝる。

與次　オット、最前この鍵も、お讓りなされし上からは、御隱居樣でも、滅多にこれは

淨閑　エ、、腹の立つ。勝手にしをれ。

妙貞　そんなら道まで仁右衛門さま。

仁右　同道しませう。淨閑どの、今日からお樂ぢや。

淨閑　知らぬわい。

與次 サ、女房は居間へ。

みや 御隱居樣。

淨閑 知らぬわい。

仁右 與次兵衞どの、ゆるりとおしけり。

與次 講中方

妙市 開きませうか。

淨閑 知らぬわい。

ト唄になり、與次兵衞、都が手を引き。奥へ入る。仁右衞門先に、妙貞、花道にて百兩をちよつと仁右衞門に渡し、市兵衞、孫六も、めい〳〵心いきあつて向うへ入る。淨閑一人うつとりとしてゐる。入相の鐘、合ひ方。

淨閑 何の事ぢや。家附きの與五郎め、不孝者ぢやと思うたが、どうでもまた眞實親身の與次兵衞は、その上を行く覆輪かけた不孝もの。イヤ又、悴は違うたものぢや

ト横手を打ち

ハテ、、惡い夢を見た事ぢや。

トうつとりとしてゐる。矢張り入相の鐘、唄にて、向うより丹平、若黨の形にて出で來り、門口より窺ひ

丹平 ア、、爰ぢや〳〵。鳥越の米問屋、山崎屋は爰ぢや〳〵。コレ、頼まう〳〵〳〵。

淨閑 エ、、やかましい、知らぬわえ。

丹平 これはしたり、山崎屋は爰か。

淨閑 知らぬわえ。

丹平 これは無作法、倉岡方よりお使ひに參つた。コレ、丹平でござる。

淨閑 知らぬわえ。

丹平 コレサ、氣をしつかりと持たつしやれ。知らぬ事はあるまい。丹平でござる。丹平でござるソ。

トこれにて淨閑、思ひ入れあつて

淨閑 ア、、丹平どのか。

ト見る。

丹平 さやう〳〵、丹平どのは三十になるかならぬに、主人のお使ひ。ア、、草臥れました。

淨閑 左樣でござらう。辻駕籠にでも乘られいで

丹平　定めて足が

淨閑　あいたかつたでござらうに、なぜ

丹平　ツン〳〵。

淨閑　駕籠にでも乘らつしやらぬぞ。

ト淨瑠璃にて語る。

丹平　エヽ、何を仰しやります。コレ、與次兵衛さま、密事の御用もござれども、書いたる物は、もし落ちるの大事を存じ、拙者すぐさま御口上にて申すでござらう。

淨閑　それは御苦勞。此方もよん所なき取込みござつて、只今の不挨拶。して、倉岡氏より御用の趣き承りたい。

丹平　イヤモウ、丈左衛門どのと同腹中のあなた樣、先達て十次兵衛が越度と成つたる胡蝶の香合、屋敷へ置くも氣遣はしく、幸ひ主人の以前の家來、今は駕籠屋の甚兵衛と申す者、大丈夫を見こみしゆゑ、彼れに暫く預け置いた。まだ〳〵御口上がござる。彼の藝者吾妻が事、身請け金三百兩と承る。何卒貴公方にて右の金子を調達あつて

ト淨閑が頭を見て

イヤ、與次兵衛さまには、こりや又ぞろ、御元服でござるな。

淨閑　さやう〳〵。今日より致して又ぞろ淨閑。

丹平　それはおめでたう存じまする。時に只今申しかけたる、三百金の御返事はな。

淨閑　ア、コレ〳〵〳〵、丹平どの〳〵、お詞のうちでござるが、今日よん所なう身代を忰に讓つて、跡の後悔。御覽の通り、又ぞろ頭は隱居淨閑、金簞笥の鍵までも取りあげられ、イヤモウ、二朱の工面も致し憎い。その儀よろしうお斷りを賴み存じまする。

ト夜き時分より下駄の市、番屋の外にて、火の用心の行燈の掃除してゐたりしが、ふつと二人が相談を聞き、門口にて聞耳立てる。

丹平　それは近ごろ氣の毒千萬。まだござる〳〵。イヤ、別儀でもござらぬが、家中橋本次部右衛門娘お照こと、丈左衛門どの至つて御懇望のところ、貴公の御子息與五郎どのへ養子嫁、只今もつてお照ことも

淨閑　サヽ、お待ちなさい〳〵。其お照が事は、ちと御相談ものでござる。それと申すも、與五郎めをほいまくる手段。さすればお照に構ひはござらぬ。こりや斯うなされ、貴公には後ほど夜に入りお照が迎ひ。その節そつとお渡し申さう。ふん縛つてお連れなさい。

丹平　然らば後ほど、お照を盗みに參るほどに、屹度お渡しなされいよ。

淨閑　何がさて〳〵。コレ〳〵、丹平どの、かねゞ〳〵認め置き申した、倉岡どのへ遣はす御狀、屆けて

おくりやれ。

丹平　承知いたした。早速身どもへ

淨閑　お渡し申さう。

ト見世の欄間に釣りし神棚の箱守りより、封じたる狀を出し

この狀慥かに倉岡どのへ。

丹平　心得てござる

ト懷中する。下駄の市、門にて思ひ入れ。

然らば後夜の鳴るを相圖に、お照をあげに

淨閑　御大儀ながら丹平どの。

丹平　後方參らう。淨閑さま

淨閑　何かと御苦勞。

丹平　ドリヤ、出直して。

ト合ひ方、暮れ六ツの鐘、丹平向うへ入る。下駄の市、跡を見送り、この跡をつけ向うへ走り入る。

淨閑、門口を締めて

淨閑　こゐや日が暮れたに、見世へ灯をともさぬかえ。神棚へ御燈火あけぬか。コリヤヤイ、善太め、

男どもは居らぬか。

ト咳やきながらのれん口へ入る。矢張り合ひ方、時の鐘、障子屋體よりお照、硯箱と書置の書きしま

ひしを持添へ、窺ひ〳〵出で來り、奥の方へ思ひ入れあつて

てる　先刻に父さんが、わたしが方へ持つてござんしたあの金は、心あつての二百兩、吾妻さんの身請

けの跡金、先へ渡した其あとは、どうでこの身を

ト書置へ思ひ入れあり、帶へ挾み、そろ〳〵と戸棚へ窺ひより、そつと戸を明け、箪笥の引出しより

財布入りの二百兩を取り出し、財布へ書置を結びつける、矢張り合ひ方捨て鐘、この時向うより下駄の

市、丹平、狀を奪ひやひ、立廻りながら出で來り、門口へ來て狀をばひ取る。此とたんにお照、窺ひ〳〵

門口を明けんとする。下駄の市、丹平を當てる。うんと悶絶して、たち〳〵と番屋の内へ倒るゝ。下

駄の市、しやんと戸をさす。この物音にお照驚き、戸に縋つて外を窺ふ。この音を聞き權九郎、行燈

をさげて窺ひ出で

権九　誰れだ〳〵。門口で今の音は何だ。

ト行燈あげ見る。外にて下駄の市、思ひ入れ。お照はつと當惑の體。権九郎よく見て

ヤ、そこにござるは、お照さんではござらぬか。コレ、お前はマア、何をしてございます。

ト手を取る、

てるアヽコレ、わしやちつと。

権九　モシ〳〵、どうかお前は味な素振りだわえ。サア、奥へござりませ。

てるサア、わしや少つとナ。

権九　エヽ、來なさいといふに。

ト お照が持つたる財布を見つけ

ヤ、こりやお前、そりやア金だが。

てるアヽコレ、それを。

九ヤ、こいつは油斷が。

ト お照を無理に奥へ連れ行かうとする。この時下駄の市、つか〳〵と入り、お照を外へ突き出し、権九郎を引つける。この間に嬉しきこなしにて、財布を持ち向うへ走り入る。権九郎、振りほどいて下駄の市へかゝる。立廻りにて権九郎が左の手を屹度ねぢあげる。

アイタヽヽヽヽ。

ト小指の跡いたむ思ひ入れ。下駄の市、よく〳〵見て

市　左の小指の切れたるは、此奴も詮議の。

権九ヤ、うぬは夜番の。

ト云はうとするを取つて押へる。

アイタヽヽヽ。どうする、どうする。

市　まさかの時は。

ト土藏の明いてあるを見つけ、思ひ入れあつて、権九郎を引立て、土藏へ打ちこみ、ぐわら〳〵と戸をさす。奥にて

次部　與次兵衛どの〳〵。

ト聲するゆゑ、下駄の市こなしあつて、門口へ出で、番屋へ入る。合ひ方になり、奥より次部右衛門、與次兵衛出で來り

與次　次部右衛門さま、もうお歸りでござりまするか。

次部　日暮れましたれば、最早お暇仕らうが、與次兵衛どの、先刻と申し、御家内の様子、一々身が心に會得仕らぬ。おてまへの家督となれば、部屋住みの與五郎に、女房はいらぬもの。娘照めを受取つて罷り歸る。さう心得て下されい。

與次　すりや、與次兵衛めが家督とござれば、弟嫁のあの照を。

次部　ハテ、添はせる男がござるまいが。

與次　イヤ、品によつては私しが。

次部　ア、、お云やるな。弟嫁が兄の女房になりませうか。殊にこなたは都といふ、藝者とやらを引入れて、身持ち惰弱がしたらいで、娘の照めを弄さみ物に致さるゝ。そりやこの親が罷り成らぬ。イケ馬鹿々々しい。サ、娘を爰へ連れてござれ。

與次　左様ござれば是非がない……コリヤ、女子ども、お照をこれへ、連れて參れ〳〵。

ト奥の方へ云ひつけ

次部右衛門さま、お照をお渡し申すからは、先程あなたの御持參なされし二百兩、お持ちなされて下さりませ。

ト合ひ方になり、戸棚の内にある箪笥の引出しを明け、金なきゆゑ思ひ入れあつて

ヤ、、、、、。最前お照が仕舞ひ置きし、財布のまゝの二包み。

次部　如何いたしたな。

與次　もし強慾の親人が。

次部　ヤ。

ト思ひ入れ。奥ばた〳〵にて善太、あわたゞしく出で來り

善太　モシ旦那様、お照さまが、お居間にお見えなされませぬ。

與次　ナニ、あのお照が見えぬと申すか。

善太　どこを尋ね申しても、さつぱりお見えなされませぬ。

與次　すりや、この金の行き道も。

次部　どう仕つた。

與次　アイヤ、夜道いとはず心願に、また觀音へ。

ト思ひ入れ。

それ、提灯付けて迎ひに行きやれ。

善太　畏まりました。

ト奥にて

七　オツト合點だ。

トのれん口より、ぶえんの七、山崎屋といふ弓張り提灯をともして出で來り

サア、どうで歸りだ。おれが一緒に行つてやらう……コレ、あのお照さんは、慥か駈落ちぢやないかえ。

善太　アヽ、これサ……役にも立たぬ事を、ハイ、行つて參りませう。

ト五ツの鐘、拍子木にて、三人とも向うへ急ぎ入る。

次部　娘へ遣はす二百兩、大金持ちのお内ゆゑ、そこらあたりへ紛れこみ……金の行くへが知れたなら、娘が在所も。

與次　歸り次第にお跡から。どうござつてもお照が緣を。

次部　これまで長々お世話の段、氣の毒ながら取り戻し。

與次　其お心ならお照が諸道具、云ひつけ置いたを其まゝ爰へ。

百九　畏まりました。

トのれん口より、重れ簞笥、挾み箱を、若い者手傳うてよき所へ並べ

九介　お照さまの三荷のお荷物。

百九　殘らず爰へ。

與次　持ち來れ。

百九　ハイ。

ト奥へ入る。

與次　次部右衞門さま、お照どのをお戻し申す上、お附けなされしこの荷物、コレ、あなたへ。

次部　受取りませう。諸道具よりは照めを去り狀、三くだり半が貰ひたい。

與次　御尤も。左樣あらんと與次兵衞が、聟與五郎の名代に、認め置いた數通の去り狀、お氣に入つたをどれなりと、次部右衞門さま、御覽なされて下さりませ。

ト次部右衞門思ひ入れあつて、書ものを、よく〳〵見て

次部　ヤ、こりや去り狀と思ひの外、諸所へ貸しつけ置かれたる、或ひは估券貸し金の。

與次　サ、その證文を暫らくあなたへ。

次部　預かり置いた納まりは。

與次　我れなき跡は弟が家督、その節めでたく與五郎へ、その去り狀をお歸しあり、お照どのとも末長

う。それゆゑ新たに去り狀を、書かぬ心をお察しあつて。

次部　身が預かりの數通の去り狀、樣子あらんず心ざし。さほど實義のお手まへが、最前みだらなあの振舞ひ、定めてあれにも。

與次　サ、それと云はれぬ實の親、淨閑どの〻無得心、血を分けたりし我れさへも、つらく當れば猶更に、義理あるお主の血のあまり、子で子にあらぬ與五郎に、家も讓らずあまつさへ、大恩うけし鴻野のお家、佞人ばらに一味して、この山崎のお家にも、か〻るがどうも御先祖へ。

次部　さてこそ讒者の倉岡に。

ト思ひ入れ。

與次　サ、それゆゑ又も無理隱居、弟に難儀もかけまい爲め。

次部　心望みのお手まへが、藝者ぐるひにあの都。

ト よき時分より都、世話女房の形に着替へ、仁右衞門、年季證文を持ち、出か〻り居て

みや　身の代の百兩ねだり取り、女房約束しやんした都といふは、與五郎さんに乳を上げたる乳母が娘今は駕籠屋の甚兵衞が、夫婦拵ぎの女わざ、お賤と申す女髮結ひ。與次兵衞さんのお賴みゆゑ、似付かぬ藝者の拵らへもの、與五郎さまはこの賤か、お預かり申しました。とはいふもの〻、

常々から、心よからぬこちの人ア〻、又ぬしの心も。

ト思ひ入れ。

仁右　都へやつた立て金百兩、殊に吳服屋小間物屋へ、渡した金を取り集め、都合合せて二百兩、吾妻どのへ跡金に、持つて行つたは、講頭、この仁右衞門が賴まれて、受取つて來た年季證文。

ト見せる。

次部　さうとは知らず早まつて、娘が家出、財布の金の行くへ知れぬも、正しく吾妻が身請けをと。

與次　貞女のお照もこの家に、置かれぬ義理に持ち返す、荷物の內を改めて。

ト箪笥の引出しを明ける。內は殘らず包み金詰め置く。こなしあつて

次部　受取り歸るは次部右衞門……こりや引出しに包み金。

與次　荷物の內は在り金の、十萬兩をお照に附けて。

次部　すりや與五郎が家督とならば。

與次　その節めでたく。それまでは、橋本氏へ預ける荷物。

次部　娘が品は受取らんが、故なき多くのあの金は。

ト よき時分下駄の市、對の上下、大小に改ため、門口に窺ひ居て

市　代々つゞく山崎屋、役目に是非なく封印いたす。

トつか〳〵と内へ通る。

次部　ヤ、すりやこの家へ封印の。

市　役目は則ち三原傳藏・鴻野の大恩うけながら、底巧みある丈左衛門、身が別家たる有右衛門、それに組みするこの家の主。

與次　サ、その親人を助けたく、講中方と連れだちて、宿老どのにて何かの樣子。

仁右　所詮お上のお疑ひ。

與次　晴れるまで牢舍のこの身。

ト肌を脱ぐ。下着の上へ繩をかけある。

みや　ヤヽ、與次兵衛さまはあの繩目。

與次　小手をゆるめて羽がひ締め。

市　それも誰れゆゑ、强慾の、親の難儀に義理ある弟、憂き目を見せじとその身に引請け。

次部　たとへ牢舍を致すとも、云ひ譯立たば直ぐに赦免の。

與次　濟まぬは人を殺せし科人。

市　惡もの鬱の長吉を、殺せしものは證據の小指。

仁右　與五郎どのにも疑ひが。

與次　イヽヤ、弟ばかりでない、この與次兵衛も小指がござらぬ、

みや　そりやソレ先刻にお照さんに。

與次　コリヤ。いらざる女の、扣へてゐやれ。

市　小指のないはまだ外に、打ちこみ置きし權九郎。

トつか〳〵と土藏を明げ、權九郎を引立て

彼奴も左の小指がござらぬ。

次部　すりや、人殺しは權九郎。

權九　アコレ、どうして私し。

トうづくまる。淨閑、つか〳〵と出て

淨閑　毛頭知らぬ權九郎、その人殺しはあの與五郎。して又何でこの家へ封印。

市　科はその身に覺えはあらうが。

淨閑　してその證據は。

ト番屋より丹平出で

丹平　其お使ひはこの丹平。旦那の悪事を見限つて、傳藏さまへ歸り忠、歸り仕事のこなたのこの狀。

ト密書を見せる。

淨閑　ヤ、その狀までもうま〳〵と。

ト立ちかゝるを、與次兵衞引ッ捕へ、屹度なつて、

與次　コレ、お年寄りの老耄が、何であらうとお前は御隱居。狀の名宛は矢張り與次兵衞、あなたは淨閑、すりやその返書はこの與次兵衞、こなたに科は懸けませぬ。うろたへずとも、ナ、モシ。

ト思ひ入れあつて

イザ、傳藏さま。

市　緣の切れたるお照が諸道具。構ひござらぬ、引取りめされい。

與次　ア、重々厚き。

淨閑　どうやら荷物に。

權九　正しく、在り金。

ト兩人かゝるを、次部右衞門、淨閑を引附ける。傳藏、權九郎に早繩かけ、ぐつと引附け

皆々　これは。

市　お上のお咎め、いちまきは、是非なくかゝる山崎屋、外に決して咎めはござらぬ。

與次　でもこの小指の疑ひが。

市　イヽヤ、彼奴にも指はござらぬ。その人殺しは權九郎、あまり横合ひ出ぬうちに。

與次　御苦勞ながら

次部　引取る諸道具。

市　引取る囚人。

ト權九郎を突きやる。丹平繩を扣へる。

丹平　科人立たう。

仁右　やがて赦免の

みや　その時めでたう。

與次　命ござらば。

ト顏見合せ、思ひ入れ、

市　次部右衞門どの。

次部　傳藏どの。
與次　お役目御苦勞。
淨閑　多くの金を。
　　トつか〳〵と行くを、與次兵衛、淨閑を引附け
與次　親仁樣。
淨閑　ヤ。
　　トきつとなる。
與次　これがこの世の。
　　トほろりとして次部右衞門と顏見合せ、思ひ入れあつて、
市　武士にもまさる。
次部　男一疋。
與次　アモシ。
　　ト淨閑を下へ引廻して引据ゑる。木の頭。
　サ、お引きなされませ。

　　ト兩手を廻す。めい〳〵思ひ入れよろしく

五幕目　大川橋の場　ひやうし幕

役名――夜蕎麥賣り、與兵衛實ハ南方十次兵衛、駕籠舁き、土手の又。質屋、善六。小揚げ、百介。同、九郎八。魚屋、ぶえんの七。山崎屋娘、お照。惡者、野手の三。駕籠の甚兵衛。

本舞臺、三間の間、向う黑幕、千部開帳札澤山に建て、橋の袂に番屋あり、すべて大川橋夜の體、水茶屋の葭簀床几、片寄せある。この上に單物をすつぽりかぶりし男寐て居る。四ツの鐘、拍子木の音にて幕明く。

トよき所に四ツ手駕籠を置き、又、客を引きゐる。仕出し、捨ぜりふにて出て入る。

又　ハイ旦那、お廉く參りやせう。ハイ、駕籠〻〻。アヽ、今夜は歸りがねえわえ。コレ、甚兵衛どの、一服のまつしやいな。

　トこれにて駕籠の内より甚兵衛出て

甚兵　又や、今夜はきついものだな。

又　さればサ、通りはあるが、みんな俄をひやかす、むく鳥同然サ。

ト莫すひつけて居る。矢張り時の鐘にて、向うより善六、質屋の手代にて、小提灯を提げ、すたく出で來る。

ハイ駕籠、お廉く參りやせう。

甚兵　モシ、歸り駕籠でござりやす。酒手で參りやせう。

ト善六に附く。思ひ入れあつて

善六　ヤア、こなたは甚兵衛どのぢやァねえか。

甚兵　ア、、善六どのか。

善六　見附けたぞく。コレ、内へ行つても留主ゆゑ、大方爰へ出てゐやうと思つて來たが、勿怪の調法。コレ、彼の品はどうしてくれるな。

甚兵　コレサ、こなたも大概知れたものだ。二朱や三朱の質ではなし、さうこれが急に。

善六　ハテ、大金だゆゑ、此方も催促せにやァならぬ……約束は十日切り、親方はわしばかりせがむわな。して、ありやァ、いよく屋敷の

甚兵　知れた事だわな。籠昇きが、あんな香合を持つて何にするものだ。斯うさつしやい、明日、お

が内へ來さつし。

善六　行きませう。おどけは退け、どうぞ片を付けて下さい。時にわしが方から遣つた書物は有るかえ

甚兵　無くつては。コレ、

ト大叭の紙莫入れより、提灯の灯にて以前の質札を出し

これであらう。

善六　見せさつし。

ト提灯の灯にて

「一札の事、一金二百兩也、右は胡蝶の香合質物に預り置候處實正也」……よしく、おれが書いた預かりに違ひない。併し、紙莫入れへ引ッ挾んで落すまいよ。

甚兵　ナニ落すものか。相談があるワ。明日來さつし。

善六　必ず賴むよ。これから向う河岸まで行つて來ねばならぬ。

甚兵　夜更けだよ。氣を付けて行かつしやい。

又　剛的に精出すな。

善六　ドレ、早く行つて來ようか。

ト捨て鐘にて善六、橋へかゝつて入る。甚兵衛跡を見送り

甚兵　べら坊め、ナー金が有るものか。

又　して、こなたは請けないのか。

甚兵　先づあゝ云つたのが今晩の茶番サ。ハヽヽヽヽ。

又　大笑ひだ。ハイ駕籠々々。

ト呼びかけて居る。揚げ幕と東の口にて、

九百　迷子やアイ、お照さまア。

七　迷子のお照さまア。

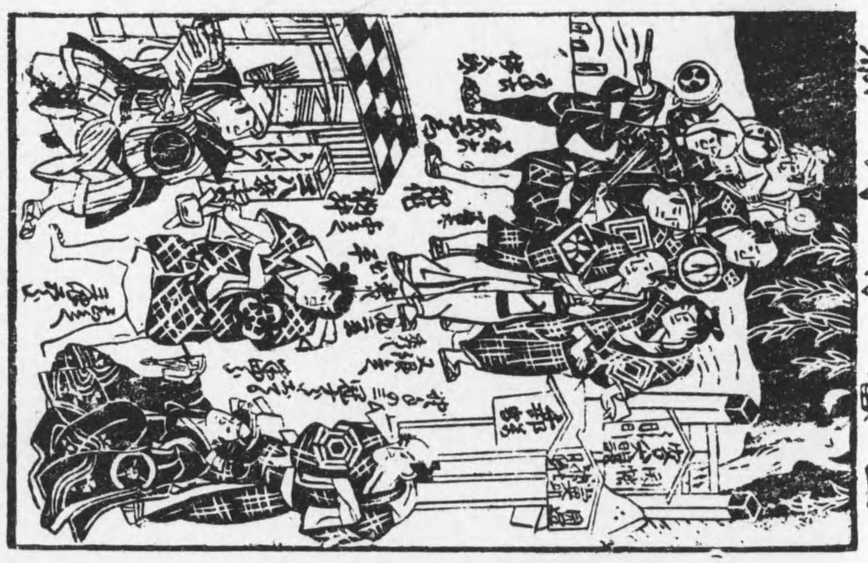
ト揚げ幕より百介、山崎屋の弓張と棒を突き、九郎八、若い者、鉦太鼓を打ち、東の口より、ぶえんの七、同じ弓張と棒を突き、善太、首へ鉦太鼓をかけ、叩きながら出て來り、本舞臺にて落合ひ

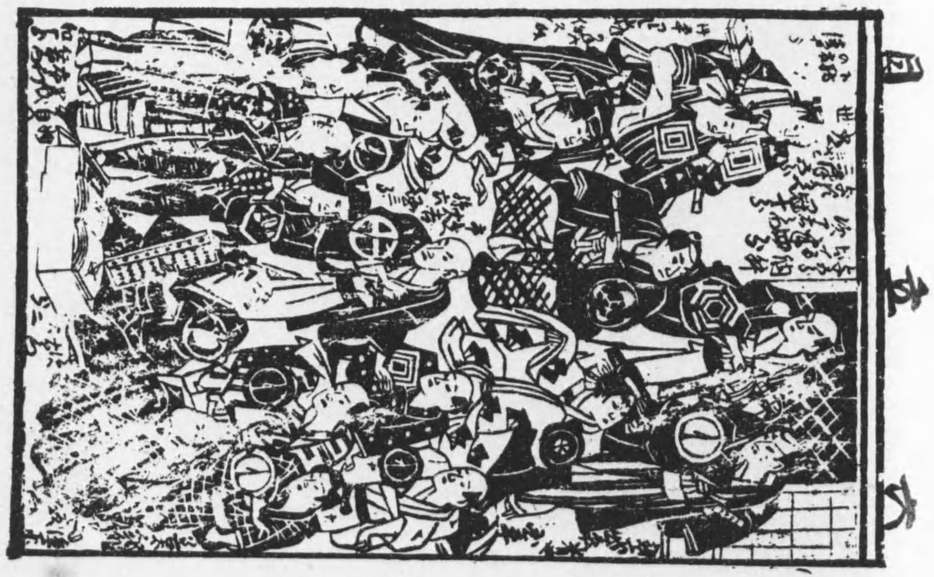
百九　誰れだ〳〵、善太に七ぢやアねえか。

七　イヤア、百助どんも九郎八どのも來たのか。

九郎　まだお照さんの居所は知れねえか。

百介　コレエ、鉦と太鼓を首へかけて、うぬは又いたづら、好い機嫌な奴だなア。





善太　コレサ、無駄どころぢやァねえ。手が足りぬから、鉦と太鼓を二役勤めまする。即ち八人藝が裸足で逃げる。

九郎　大べら坊め。もう一人頼むがいゝわえ。

善太　それでも、助けてくれ手がねえわえ。

ト思ひ入れ。駕籠の者を見て

コレ〳〵、駕籠の衆や、なんと、駄賃はいくらでもやるから、一役助けてくれまいか。

又　物は相談だ、駄賃がよくば行つて進ぜう。コレ、甚兵衛どん、行つてもよからうか。

甚兵　隨分行つて進ぜろ。したが行がけに、番所に虎か象が居やうから、寄越してくれろ。

又　合點でごんす。

甚兵　して、お前方はどこからござつた。

九郎　アイ、わしらは鳥越の山崎屋でござるが、娘御が家出をしましたよ。

甚兵　エヽ、アノ山崎屋の娘御が見えねえのか。

皆々　さうサ。

甚兵　ハテ、そりや氣の毒な……コレ、八や、早く棒組を寄越せよ。

又　合點でごんす。サア、行きませう。
百介　これから本所の方を尋ねませう。
七　おいらは江戸の方へ行かうわえ。
皆々　迷子のお照さま〳〵。
ト土手の又は此うちへ交じり、鉦を叩き、向うと橋へ別れて入る。
甚兵　アヽ、そんなら米問屋の山崎屋の内の娘が、駈落ちと見えたわえ。
ト捨て鐘になり、向うより與兵衛、やつし形にて、八わたやと書いたる行燈を付けたる風鈴蕎麥の荷になかつぎ出で來り、直ぐに本舞臺へ來り、甚兵衛を見て
與兵　ヤ、甚兵衛どんか。この頃は逢ひませぬの。
甚兵　オヽ、蕎麥屋の與兵衛どのか。どうだ、商ひがごんせう。
與兵　アイ、もう十四五ありやす。今に賣つて仕舞ひやす。
甚兵　そいつはいゝの、一杯つけてくんねえ。
與兵　アイ、熱もりか。
甚兵　オイ、辛味をしつかり入れて下さい。

與兵　承知サ。
ト荷の内より蕎麥笊へ蕎麥を入れ、思ひ入れよろしく、捨ぜりふにて盛つて出し
サア、出來やした。唐辛子はしつかり入れたよ。
甚兵　その事サ。
トさら〳〵とかつこむ。
もう一杯下さい。
與兵　オイ、お代りかな。
ト皿を取る、
甚兵　コレ、皿が移の香がするによ。ちつと洗ひねえ。
與兵　アヽ、どうしたの。洗つて盛りやせう。
ト片荷にある手桶にて洗はうとする。この時、箍の切れたる音して桶の水こぼれる。
甚兵　アヽ、何の音だ〳〵。
與兵　サア〳〵、大變だ〳〵。
甚兵　どうした〳〵。

與兵　桶の箍が切れて、水がみんな溢れたワ〳〵。こいつは大變々々。

甚兵　そいつはとんだ事だ。蕎麥屋に水がないとは、河童が皿を割つたやうなものだ。

與兵　アヽコレ、どのみち水がなくてはならねえが……アヽ、好い事があるわえ。コレ、甚兵衛どん、お前にちつと御無心があるワ。

甚兵　なんだな。

與兵　わしは向う河岸の番所で、米かし桶に水を一ぱい貰つて來るから、其うちこの荷をこなた、ちつとのうち見て居て下さいな。

甚兵　オイ、よし〳〵、見て居て進ぜう。早く行つて來さつし……エヽコレ、棒組の粂野郎でも來さうなものだが。

與兵　そんなら頼みますよ。この桶も番太が所へ預けて置かう。

ト箍の刎れた桶を取つて、

ちよつと行つて來ますよ、頼むよ。

甚兵　早く歸らつしやいよ。

與兵　直に行つて來ます。

ト捨て鐘になり、桶を持つて捨ぜりふにて橋の方へ入る。

甚兵　ハテ、あの野郎どもは、もう來さうなものだが。

ト呼びかけて居る。向うばた〳〵にて、お照、裸足にて、襟へ財布をかけ、いつさんに走り出で來り、直ぐに本舞臺へ來る。

甚兵　ハイ、駕籠々々〳〵、お駕籠參りやせう。お廉く參りますぞえ。

ト呼びかける。お照窺ひ見て

てる　モシ〳〵、駕籠屋さん。

甚兵　アヽ、女中だね。お召しなさるのかえ。

てる　アイ、どうぞ乘せて下さんせ。早う乘せて下さんせいな。

甚兵　畏まりました。アヽコレ、マア、野郎めら、何をしてうせるやら。あの又野郎めも、あの位に云つてやつたに……モシ〳〵、お急ぎなら、マア、お召しなされませ。

てる　どうぞ早う連れて行て下さんせいな。

甚兵　ようござりやす。サア、お乘りなされませ。

ト介抱して駕籠へ乘せようとする。お照とつかはして爪づき、爪を蹴かへす。此はずみに懐の金財布

ぶらりと下がる。

てる　アイタ、、〳〵。

甚兵　どうなされました〳〵。

てる　爰の石に爪づいて、爪を怪我しました。アイタ、、、、。

甚兵　ア、、そりやお危なうござりました。ドレ、莨入れに治丹坊があつたかしらぬ。

ト紙莨入れの内を尋れ、思ひ入れあつて、

ア、、また折悪くみんなにした。待ちなさい、結へてあげやせう。紙があつた。

ト莨入れの半紙を出し、引裂いて足の指の血を拭き、捨ぜりふにて介抱する。この時襟に掛けたる財布、甚兵衛が頭へさはる。思はず甚兵衛これを見つけ、思ひ入れあつて

甚兵　モシ、こりや何でござりますえ。

てる　金でござんす。

甚兵　ア、、金かえ。

ト思ひ入れ。捨て錦、烈しく打つ。

てる　モシ、草履を買うて下さんせいな。

甚兵　なにサお前、お駕籠でござりやす。草履はいりやせぬが、して、お前はお一人かえ。

てる　アイ、一人ぢやゆゑに、犬が怖うてならぬわいな、

甚兵　モシ、そしてお前、どこまでござりますえ。

てる　エ。

甚兵　イヽエサ、先きはどこまで行きなさるのだえ。

てる　アイ、與五郎さんの居さんす所まで、連れて行て下さんせ。

甚兵　エヽ、與五郎、そりやどこに居られます。

てる　サア、その居なさんす先は知れぬわいな。

甚兵　そいつは空な尋ねものだ。いま懐から出かゝつた、高もしつかり、娘の身で、徒歩や裸足の駈落ちは、てつきりお前は山崎屋の。

てる　よう知つて居なさんすの。

甚兵　モシ、向うから爰へ追手の衆が。

てる　エヽ。

ト恟りする。向う揚げ幕にて大勢の聲して

皆々　迷子のお照さまア。

ト呼ぶ。お照恟りして

てる　早う連れて行て下さんせ〳〵。

ト甚兵衛が後に縋り、慄へて居る。

甚兵　ようござりやす。こんな事がわしらの商賣。お前を尋ねる人が來やうが、滅多に渡す事ぢやアご
ざりませぬ。落ちついてござりませ。

てる　それでも　どうも、心が急いてならぬわいな。

甚兵　よし〳〵、今連れて行つて、ト云つたところがおれ一人。エヽ、コレ、棒組めらは焦らしやアがる。
といつて一人でも舁けまいし。

トまた向うにて

皆々　迷子やアイヽヽヽ。

ト聲する。

てる　アレ、爰へ來るわいな〳〵。

ト思ひ入れ。

甚兵　アヽコレ、困つたものだ。

ト蕎麥の荷を見付け、思ひ入れあつて

モシ、お嬢さん、駕籠でお前をやりたいが、棒組が居ないから、あの大勢に見らるゝが否ならば
斯うしなさい、ちつとの内、この蕎麥荷の中へ隱れなさい。さうして、わし一人で擔いで行き、
わしが、内から送らせてやりやせう。さうなされませ〳〵。

てる　どうなりと、好いやうにお賴み申します。

甚兵　そんなら爰へ入りなさい〳〵、ドレ〳〵、片荷ずらねえやうに、此方の道具を此方へぶッこんで

トとつかはと片荷を明ける。この拍子に紙莫入れを落す。

てる　サア、早う隱して下さんせ。

甚兵　ようござりやす。わしが附いてゐちやア、指でも付けさせる事ぢやアござりませぬ……ソレ、こ
ごみなさい。頭が危ないよ。

ト介抱してお照を、蕎麥荷の内へ入れる、また財布ぶらりと下がる。甚兵衛思ひ入れ。向うにて

皆々　迷子やアイ。

トまた呼ぶ。甚兵衛ふつと氣をかへ、手早く荷の内へお照を隱す。矢張り捨鐘て、向うを見て居る。

若い者大勢、弓張り六尺棒を持ち、鉦太鼓を叩き、向う揚げ幕より出て、下の間の歩みを通り、東の口へ入る。甚兵衞きつと見送り、

甚兵　この間に内へ。

ト行燈の火を吹き消す。九ツの鐘鳴る。思ひ入れあつて甚兵衞、荷を擔ぎ、向うへ入る。矢張り捨て鐘。橋の方より與兵衞、小桶に水を汲み、捨ぜりふにて出で來る。

與兵　ヤレ〳〵、甚兵衞さん、待ち遠でごんせう。やう〳〵水の工面をして來ました。大きにお世話でござりやした。

ト あちこち見廻し

こりやアどうだ。甚兵衞どのも、おれが荷もねえワ。こいつはどうだ。サア〳〵〳〵、大變だ。荷が見えないワ〳〵。

ト いろ〳〵尋れる。駕籠を見附けて、

イヤア、こりや慥か甚兵衞どのの駕籠だが、この、駕籠が有るからは、爰らに甚公も居るであらうが、イヤハヤ、焦らすワ〳〵、大事の一身代だ。尋ねて來にやアならねえ。ドレ一走り。

ト 行かうとして又立戻り

イヤ〳〵、おれが荷ばかり探しても、あの駕籠を爰へ捨てゝも行かれまい。何にしろ、甚兵衞が内へ、この駕籠を持つて行つたら、おれが荷の行道がわからう。アヽコレ、とんだ話しだ。あの駕籠甚が内は、慥か田中であつたわえ。

ト 四つ手駕籠を一人して擔ぎ、行かうとして、落ちて有る莨入れにつまづく。此とたんに時の鐘烈しく、床几の上に寢て居る男、手足を伸ばし、ぐつと伸びをして起上がる。野手の三、月代、古ひとへ物を振るつて着る。與兵衞莨入れを取上げ

與兵　なんだ、莨入れが、落ちて居たワ。アヽ、中に何だか書いた物があるわえ。なんだ。

ト 思ひ入れあつて、莨入れの中より書付を出す。この聲に野手の三思ひ入れ。手拭を帶にしめ、そろ〳〵出で來る。空へ月出る。與兵衞、書き物を月にすかし見て

アヽ、なんだ、一札の事、一金二百兩也。

ト 讀む。野手の三そつと前へまはり、書き物を下から取る。與兵衞こなしあつて野手の三をとらまへる。野手の三ふり切り逃げんとする。與兵衞野手の三をとらへ、面白き立廻りあつて、トヾ與兵衞野手の三、書き物を爭ふ。書き物ちぎれ、初のかた與兵衞の手に殘り、名宛のかた、野手の三の手に殘る、これより兩人くらがりの思ひ入れ、駕籠を枷によろしく立廻りあつて、駕籠を横に倒す。與兵衞駕籠

へ入り、兩手にて駕籠を横に持ち、思ひ入れあつて
泥坊め。
ト云ふを木の頭、野手の三思ひ入れあつて、書き物をすかし見る。與兵衛思ひ入れあつて
とんだ奴だ。
ト云ふ。キザミにてよろしく、

六幕目

田中駕籠屋の場

拍子幕

役名――夜蕎麥賣り、與兵衛實ハ南方十次兵衛。三原有右衛門。質屋、善六。駕籠舁き、土手の又。同、田中の辰。同、入谷の金。下女、おなべ。藝者、お光。甚兵衛女房、お賤。入間彦助。惡者、野手の三。山崎屋與五郎。山崎屋娘、お照。甚兵衛妹、お早。駕籠屋甚兵衛。

本舞臺、三間の間、茅屋根の二階作り、小屋根に引窓あり、反古貼り障子を建て、よき所に丸太階子をかけたる上り口、下家は反古貼りの壁、のれん口一枚びらきの押入れ、上の方寒竹の藪の外、隣りの二階を見せ、四ツ目垣に葉鶏頭、紫苑、萩、秋草の盛り、よき所に井戸、縄釣瓶おろしあり、門口にかご甚と書いたる掛け行燈、路地口、すべて田中駕籠屋の内の體、外に前幕の蕎麥荷を下ろしある。隣り二階の琴唄にて幕明く。

ト お賤、前だれがけ女房、女髪結ひにて、お光、藝者の形、ふだん着にて鏡臺に向ひ、お賤、お光が髪を結うて居る。おなべ下女の形、團子を丸めて居る。この見得にて幕明く。花道へ入谷の金、田中の辰、駕籠舁きにて土手の又を駕籠に乘せ、花道の内を捨ぜりふにて駕籠の稽古して居て、

なべ　サア〳〵、お賤さんえ、月見の團子も、わたしがみんな丸めてしまうたぞえ。

しづ　そりや大儀でござんした。サア、お光さん、もうようございます。ヤレ〳〵、お前もさぞ待ち遠でござりました。今日はどうでも月見ゆゑ、大分仕事がござんしたわいなア。

みつ　わたしも昨夜結ふてもらはうと思うたに、お屋敷がござんして、結ふ間もなう撫で付けて、今日また下谷のお客と、根岸のお下屋敷ぢやわいな。

しづ　そりや大方夜が更けませう。今日はマアこれで堪忍しなさんせ。また明日は結ひ直してあげようわいな。

みつ　なんのいなア。隨分ようござんす。外の手と違うて、お賤さんの結はしやんしたは、また違ふわいなア。

なべ　イヤモウ、そりや世間で評判のある、濡れ髪のお賤さん、わつちもお前の弟子になつて、濡れ髪が弟子の塵紙のおなべといふ、きつとした女髪結ひになる氣ぢやわいな。

しづ　アヽモウ、あんまり習はいでもよいものぢやわいな。

ト手を拭いて居る。門口の三人稽古をやめて

又　ヤレ〳〵、駕籠の中でおらア龜の尾が痛かつた。

辰　どうでも龜井戸だけに、かめとひねるやつサ。

金　又は乗りざまが悪い。びく〳〵として舁けるものぢやアねえ。

又　よしてもくれろ。この五月からおらア乗りづめに乗るやつサ。

辰　時にお賤さん、頭はどこへぞ行かれたかえ。

しづ　なんのいな、昨夜遅う戻らしやんして、眠いというて二階に寐てぢやわいなア。

又　モシ、ちよつと起して來ようかえ。

ト行かうとする

しづ　アヽコレ、起すと跡で機嫌が悪い。構うて下さんすな。

金　モシ、お賤さんえ。あの蕎麥荷はどこから來て居るえ。

しづ　さればいな。昨夜ぬしが、あの荷を預かつたというて、擔いでござんして、ぬしの駕籠は先へ預けてござんしたわいな。

なべ　ほんに、道理で門に風鈴の荷があると思つた。そんならわたしやア、明日結うておくれえ。

しづ　アイ〳〵、どうぞ今日は免して下さんせ。

みつ　そんならわたしも行きやんせう。

ト行かうとして、

みつ　ほんに、お早さんは、どこへござんしたえ。

三人　成る程、お早さんが見えねえの。

しづ　あの子は月見の買ひ物に行てぢやわいな。お前、歸りがけに逢ひなさんしたら、戻らんすやうに云うておくれえ。

みつ　アイ〳〵。合點ぢやわいな。

又　お光さん、送つてあげやうか。

みつ　アイ、おかたじけ。

辰金　エヽ、附合ひなさるの。

なべ　わつちを送つておくれぬか。
三人　狼に頼みな。
なべ　オヤ、好かねえナウ。
みつ　お賤さん、明日え。
しづ　ようお出でたえ。

ト隣り二階の唄になり、お光おなべ向うへ入る。

又　アレ〳〵、あの唄はどこだ。
辰　ありやア隣の下屋敷よ。
金　アヽ、今夜の月見に洒落るのか。ほんに今日は、今戸の八幡様も影祭だな。
又　さうサ、いざり屋體を拵へたな。ちつと囃しに行かうか……アイヤ、そりやアさうと、月見の支度はいゝかえ。
しづ　今おなべどのが、いし〳〵を拵らへて居てぢやわいな。
三人　ドレ、見せなさい。

ト桶の中の團子を見て

辰　コレ、見なさい。斯うあらうと思つた。うぬが面を見るやうに丸めやアがつた、
しづ　よいやうに直して下さんせ、
三人　おつと合點だ。ドレ、丸めべいか、

ト捨ざりふにて團子を丸める。お賤、七輪を引寄せ、土瓶をかけ、煮花を仕掛ける。聖天の鳴り物になり、向うより善六、質屋にて、すた〳〵と出で來り、門口へ來り

善六　お賤さん、お急がしいの、
しづ　善六さんかえ、
善六　アイ、昨夜の約束、甚兵衛どのはお内かえ、
又　なにサ、頭は二階に

ト云はうとする。

しづ　コレ、……イエ、留守ぢやわいな、
善六　アヽ、また留守かえ。さうあらうと思つた。毎日々々、留守だ〳〵も久しいものだ。若い手合ひは二階と云へば、お内儀は留守だと云はれる。どうするものだ、留守ならよしサ。コレ、お賤さんいつぞや千住で、忘れはしまい、十日限りだといふゆゑに、香合一つが二百兩。あいつもこの頃

悪い噂。マア、無駄な事は跡へ廻して、コレ、かみさん、請けらるゝなら請けなさい。あの時わしが達引で、質に取つたばつかりで、こなさんは勤めをしねえぢやアねえか。すんでの事に賣られるところを、善六が料簡一つで、勤め奉公に行かねえよ。サ、請けて下さい、と云つたところが二百兩の金は有るまい。お賤さん、サア、來なさい。

ト お賤が手を取つて引立てる。

しづ　善六さん、わたしをどうしなさんす。

善六　ハテ、香合とお前と入替へにして、二百兩埋め方をするわな。サア、來なさいな、

しづ　エヽ、放しなさんせ。

ト 振り切る。三人の者これを見て、

又　なんだ、この質屋の唐變木め、頭が留守だといふに、かみさんを捕らまへて、どうしやアがるのだ。

辰　さうだ〳〵、なんだ、入替へ物にかみさんを連れて行く。コレエヽ、うぬが内ぢやア、人間で質の出し入れをするか。面白いワ。コレ、盆前にぶッ殺した結城木綿の單物と、黑七子の帶の代りにこの金野郎をやるから、入れ替へて貸してくりや。カウ、金公、ちよつと行つてくりや。

金　行かねえでどうするものだ。コレ、てつか質屋のさぼてん野郎め、うぬが内へおれをお連れ申してな、この辰が雜物を入れ替へて貸してくりや。コレ、代物が米を喰ふよ。三度づゝ据ゑ膳で、菜肴を付けやアがれ。御酒もあがるぞ。とつけもねえ猿唐人めだ、

善六　なんだ、この極樂蜻蛉めら。うぬらが知つた事ぢやアねえ。死んだやうにしてうしやアがれ。

又　おきやアがれ、大きなあごたをつくと、番頭に引渡して、吠え面をかゝせるぞ。

辰金　この野郎を連れて行くべい。

三人　うしやアがれ。

善六　どうしやアがる〳〵。

しづ　ハテマア〳〵、ようござんすわいな。

三人　退きなさい、連れて行くわい。

善六　否だわえ。

三人　うしやアがれ〳〵。

ト屋體囃子になり、捨ぜりふにて三人、善六を引立て行く。お賤さゝゆるを振りきり、爭うて向うへ入る。お賤跡を見送り

しづアヽコレ、手荒うしなさんすな。ほんに若い衆といふ者は、騙さんしてもよい事を、アヽ、氣の揉めた。

ト思ひ入れあり、向うを見やるうちに、七輪の土瓶煮えかへりて、ぱつと灰立つ。お賤かけ寄つて土瓶を取上げ

これはしたり、そこら中が灰だらけになつたわいな、ドレ、出花をちよつと、

ト茶碗へつぎ、二階へ行かうとして

イヤ〳〵、また起したとて、いつもの小言。目の覺めるまで。

トよき所へ置き、また茶碗を取つて茶をつぎ、盆へのせて、二階の方に心遣ひあつて、押入れ方へ差より、思ひ入れ。合ひ方になり

モシ〳〵、與五郎さま、嘸お氣づまりでござりませうが、さま〴〵と惡いお噂。ぬしにも譯を打明けて、云はうと思へど、その間もなう。目が覺めたなら間を見合せ、あなたの事を……モシ、お茶一つ上げませう。

ト開きを明けかける。内より與五郎、手を出し茶碗を取る。この時揚げ幕にて

三人うつちやつておきやァな〳〵。

三　ハテ、好い加減に料簡しやれな。

トこの聲を聞きお賤、開きをたてる。屋體囃子になり、向うより野手の三、下駄がけ、柄樽をさげ、三人をなだめながら捨ぜりふにて出で來り

三人兄イや、打つちやつて置きやな〳〵。

三人ハテ、もういゝわえ。向うは一人、てまへ達は三人、一つづゝぶつても堪らないワ。質屋には又用もあるものだ。好い加減にしやな〳〵。

又　サ、用があるから賴めばの、くらひそばへた事を云ふから、始まつたいさくさサ。

三　おれも今日は、てまへ達の親方といふ、駕籠甚がところへ、ちつと用があつて、一升提げて來たのよ。亭主は内か。

三人まだ寢て居られるわな、

三　起きた時分なら行つて逢はうか。

三人サア、來さつし。

ト鳴り物の切れにて本舞臺へ來て

三　ハイ、おかみさん、御免なさい〳〵。

三人　サア、入らつしやい〳〵。

ト皆々内へ入る。

しづ　いつに見馴れぬ若いお方、ぬしはどこからござんしたえ。

三人　アイ、この男はね。

三　道行はわしが話しやせう。モシ、お前がおかみさんのお賤さんかえ。こりやァお初にお目にかゝりやした。わつちやァ野手の三といふ、無商賣で暮らすづるけ者サ。友達手合ひが云ふには、遊んでゐずと、ちつと夜駕籠にでも出るがよいと申しやすから、何も商賣と、差詰め此方の頭を頼んで、この手合ひ同然に、辻駕籠の弟子入りに、わざつと一升提げて來やした。おかみさん、今からお世話をお頼み申しやす。

ト柄樽を出す。

しづ　これはマア改まつた。いらぬ事を、よしになさんせいで。甚兵衛どのも昨夜遅う歸りまして、自由ながらまだ寢て居られまする。目が覺めたら話しやんせう。遊んで行きなさんせえ。

三　アイ〳〵、お忝うござりやす。モシ、おかみさん、ちつと外に聞きたい事がござりやすが、爰の妹御のお早さんとやらは、何かえ、まだ御亭主はねえかえ。

しづ　アイ、あの子は、まだ獨り身ぢやわいな。

三　人の世話にでもなつて居なさるかえ。

しづ　イヽエ。

三　おもしろ狸。

しづ　エ。

三　とんだ化け物だ。

トまじめになり、お賤思ひ入れ。

しづ　モシ、三さんとやらえ。どうでもぬしの目の覺めるのは間がござんせう。ならう事なら後方に。

三　アイ、併し又と云つても憶劫だ。起きなさるまで待ちやせうよ。

しづ　でも昨今なお前とわたし、馴染のないので、何の話しも。

ト押入れの内へ心遣ひあつて、歸したき思ひ入れ。

又　カウ〳〵、三公や、おらが内へ來さつし。

三　アヽ、又が内はこの裏か。

金　下歯が剛的だア。あよんで見や。

三　嬶アがあるか。
又　三公、ソレ千住の彼のよ。
三　久し振りでとんだ一座だ。一升取るべい。
又　そいつは話せるの。
三　そんならおかみさん、又が所に居やすよ、起きさしつたら、必ずわつちを。
しづ　アイ、知らせやせう。
三　お賤さん、待つて居やすよ。
三人　サア來さつし。
ト合ひ方になり、野手の三、三人に交り、捨ぜりふにて門口路地の内へ入る。この内二階の障子を明け、甚兵衛、引窓より覗き居る。
しづ　何ぢややら、つひに見た事もないあの男、見かけから、どうやら一癖ありさうな。殊に隠まふ押入れの。
ト寄らうとする。引窓より
甚兵　嗅アや〳〵。

ト覗いて呼ぶ。お賤恟りして
しづ　エヽ、お前、目が覺めたかえ。
甚兵　今の若い者は何だ。
しづ　野手の三とやらいふ男がな、駕籠の弟子になりたいと、お前の起きなさんすを、あの又どの〻所で
甚兵　待つて居るか。
しづ　アイ。
ト甚兵衛、思ひ入れあつて
甚兵　野手の三、聞いた名だが……オヽ、其奴は慥か胸氣な奴だが。コレ、嗅アや、質屋の善六が來たら留守だと云へよ。
しづ　サア、その善六どのがな、今も來て、あの香合を流すか、但し二百兩金を拵へるか、勤め奉公にアノわたしを。
甚兵　エヽ、打つちやつて置け。出來るときにやア出來やうわえ。
ト聖天の鳴り物になり、向うよりおなべ、足早に出で來り

なべ　モシ〳〵、お賤さん〳〵、おかみさんが急にお前を呼んで來いとの事。ちよつとお出で〳〵。

ト賤が手を取つて引ッ張る。

しづ　アヽモシ。先刻も云ふ通り、わたしは今日はどうも。

なべ　ハテ、ちよつと來ておくれな。

ト引ッ張る。

甚兵　コレ〳〵嬶アや、外の所ぢやアない。ッイ行つてあげやな。

しつ　それぢやというて、わたしやアノ押入れに。

甚兵　ナニ。

ト思ひ入れ。

しづ　追付け行かう程に、マアお前は先へ。

なべ　サア、一緒にお出でな。

甚兵　ハテ、ちよつと行きやれな。

ト唄になり、ぴんしやんとして押入れへ心を殘し、お賤をおなべ、捨ぜりふにてせり立て、向うへ入る。甚兵衞二階より跡を見送り

妹も嬶アも居ないから、心置きなくあの子の素性。

ト合ひ方になり、二階の障子を明ける。お照、前幕の形にて、財布へ入れたる二百兩の金と、書置を持つて居る。

コレ〳〵、娘御さん、お前、ひもじくはないかえ。

てるイエ〳〵、まだ欲しうはござんせぬが、昨夜から深切に、いたはつて下さんすお前、お禮は詞に述べられませぬ。有り難うござりまする。

甚兵　なんの禮に及ぶものかな。聞けばお前も、大身代のあの山崎屋の娘御とあれば、まんざら先の知れない人でもなし、定めて聟どのが、お前の氣に入らぬのか、また舅がむづかしく、よん所なく淵川へ、身を沈めるといふやうな事と見たゆゑ、それで蕎麥荷へ入れて連れて來たは、お前の心意氣を聞いて、内へ歸して上げようと思つて、昨夜から二階へ隱し、妹にも嬶アにも沙汰をせぬのは、惡く氣取ると小むづかしいから。コレ、大概な事なら、わしと一緒に、晩には歸りなさいよ。

てる　成る程、深切なお詞、嬉しうござりまするが、わたしやその聟さんが氣に入らぬの、舅御に飽いたのと、申すやうな事ぢやござりませぬ。一旦家出したからは、もう内へは歸られませぬ。

甚兵　アヽ、内へ歸られぬとは、外に色でも。

てる　エ、なんのマア、さういふ事ぢやござんせぬ。わしたが殿御は與五郎さん、大身代とはいふもの
の、まだ部屋住みの心に任せず、苦勞さしやんす二百兩、どうぞ心を休めうと、何をお隱し申し
ませう。親御さんの目を忍びて、持つて參つた二百兩、與五郎さんに渡したうござりまする。こ
の金渡したその跡は、所詮わたしは。

ト財布入りの金を出し、思ひ入れ。甚兵衛見て

甚兵　そりやアノ、ほんの金か。

てる　アイ、二百兩ござりまする。

甚兵　ハテ、有る所には。

ト ぢろ〳〵見て

その書いた物は何だ。

てる　アイ、こりや少つと私しが。

ト思ひ入れ。

モシ、そこらに、私しが櫛は落ちてはござんせぬかえ。

甚兵　ナニ櫛が。

てる　アイ、七寶つなぎの蒔繪の櫛が。

甚兵　アヽ、そりやア昨夜落しはしねえかの……マア、その書き物をちよつと。

ト寄るな、ちやつと懷中して

てる　イヽエ、こりやどうも。

ト思ひ入れ。

甚兵　ハテ、大まい二百兩、娘の身分で。

ト屹度目を附ける。向う揚げ幕にて

しづ　お早さん、わたしが持つてあげようわいなア。

トこれにて甚兵衛、障子をピツシヤリと閉す。テンツヽになり、向うよりお賤、枝豆を持つて出で來
る。跡よりお早、提げ籠に入れし蛤を持ち、片手に薄二三把持つて出で來る。花道にて

はや　モシ、お賤さん、わたしが持つて行きやんせう。サ、爰へ寄越しなさんせ。

しづ　これはしたり、お前ばかり持つ役でもござんすまい。わたしが持つて上げようわいなア。

はや　して、兄さんは目が覺めてかえ。

しづ　アイ、慥か起きてゞござんした。月見の買ひ物も、其やうに忙しなうせいでもすむ事を、朝から

お前を使ひに出して、わたしや氣の毒ぢやわいな。

はや　イエモウ、兄さんの忙しいは、いま始まつた事ぢやござんせぬ。嘸お前、うるさうござんせう。

しづ　イエモウ、あの氣性を知らいでは、どうで一日も女房になつて居られぬわいなア。ホヽヽヽ。

サア、來なさんせ。

ト矢張りテンツヽにて、兩人本舞臺へ來り

はや　兄さん、いま戻りましたぞえ。

ト上の方の井戸端にある手桶の中へ薄を入れる。二階より甚兵衛下りて來り

甚兵　大分使ひが遲かつたの。お賤はもう歸つたか。

しづ　ハイ、早い筈ぢやわいな。ツイ撫でつけるばかりぢやわいな。

甚兵　道理で早かつたな。コレ、蛤を買つたか。

はや　アイ、買うて戻りました。

甚兵　よく洗つて、砂を吐かして置かつし。

はや　アイ、洗うて置きやせう。

ト立たうとするを甚兵衛留めて

甚兵　コレ〳〵、嬶アにさせやな。

はや　なんのいな、ちよつとわたしが。

甚兵　ハテ、てまへにやア話しもあり。ドレ、寢ころんで。

ト思ひ入れ。

嬶アや、枕はないか。

しづ　アイ、二階にござんした。ドレ、取つて來て。

ト行かうとする。甚兵衛うろたへ

甚兵　アヽコレ、二階なら行くにやア及ばぬ。そんなら寢ころぶにも及ばぬ。サアコレ、お早、ちよつと來さつし。話しがあるよ。

はや　アイ。

ト合ひ方になる。

甚兵　妹や、今てまへに蛤を洗はさず、水仕業をさせねえも、手足を太くしまい爲に、この間から云ふ事だが、おぬしはどうでも、てかけ妾の口があつても、その奉公は不承知か。

はや　アイ、いま此やうに兄さんのお世話になる身を以て、不承知のなんのと、其やうな我まゝな事も

申しませぬが。

甚兵　サ、我まゝな事を云はねば、コレ、爰に嬶アも聞いてゐるが、まさかの時に力になるは同胞の役だワ。おぬしは知るまいが、いつぞや牢へ入つたも、元は金から起つた事。その時はまだ竹の塚に居た時よ。あの土地にも住居がならず、この頃田中へ引ッ越したが、その砌りは既に嬶アも賣らうとしたが、その借金が今におれが骨がらみ、質屋にはせがまれる、屋敷からは催促。イヤモウ、どうにもなるものぢやァねえ。

はや　サア。それも大概お賤さんの、噂に聞いて知つて居やんす。よし又お前が、事わけ云うて賴まんせいでも、親のない跡は兄さんは親も同然、お前の爲になる事なら、わたしがやうな女でも、妾奉公、月圍ひ、勤め奉公に賣られても

甚兵　大事がなくば、相談して

はや　サア、あげたいものぢやが、どうもわたしは。

甚兵　亭主があるか。

はや　アイ。

甚兵　亭主は何だ。

しづ　ハテ、それまで顯に訊かいでも。

甚兵　コレサ、兄が訊くのに誰れに遠慮。妹が亭主は。

はや　アイ、侍ひでござります。

甚兵　アヽ、武士か。名は何といふ。

はや　それはどうも。

ト思ひ入れ。

甚兵　云はれねえと。ハア、あんまり碌な者でもあるまい。

はや　サア、身狀が良いか惡いかは、親兄弟の許しなき、相對づくのころび合ひでも、きつとした夫は侍ひ。今にも尋ねてござんすりや、女夫にならにやならぬ約束。それゆゑどうも兄さんの、手詰、めも知つても儘ならぬ、我が身ながらも主あるわたし、聞分けあつて、めぐり逢ふまで。

甚兵　兄が所の居候ふ、妹ながら愛嬌も、色氣も持つた生れ付き、いま金になる最中に、向うの知れぬ男を待つは。

しづ　分明ならぬ事ながら、先のお方も侍ひの、今にもござんすその時は、いはゞお前は兄の事。

はや　武家の小舅不足なう、左團扇の樂隱居、孝行盡すは妹の役。

甚兵　駕籠の蒲團も綾錦の、あんぺらで張る四つ手駕籠、さて息杖は紫檀か黒檀。

はや　なんなとお前の好き次第。

甚兵　矢張り駕籠を舁かせるか。コレ妹、おぬしは一人呑みこんだが、いよ〳〵尋ねて來るといふ、證據があるか。

はや　ござりまする。互ひにめぐり逢ふといふ、證據は爰に。

ト合ひ方になり、片脇の針箱の内より、袱紗に包みし片割れの茶碗を出し

モシ、兄さん、この茶碗の片割れを、持つてござるがわたしが夫、つぎ合すれば夫婦一對。

甚兵　割れた茶碗が證據なら、おぬしが亭主は武士ぢやァあるまい。てつきりそりやァ

はや　エ。

甚兵　燒つぎ屋であらう。

しづ　何をマァ阿房らしい。コレ、お早さん、云はゞ茶碗のその缺けは、お前の爲には殿御ぢやぞえ。

はや　アイナア。云はしやんすりや男も同然。わざと今日は祝ひ日の、それを敬まふこの神棚、茶碗の片々を。

ト袱紗のまゝ神棚へ茶碗の片々をあげる。

しづ　ほんに今もらうたこの酒、お神酒に上げて置かうわいな。

ト柄樽を出す。甚兵衞見て

甚兵　成る程、酒があるなら、こいつは幸ひ。鼠入らずに鮭の燒いたが。ドレ、一杯やらうか。

ト すつと立つて押入れへかゝる。お賤うろたへ、開きを押へ

しづ　ア、滅相な。どうして爰に。

はや　でも今朝までもあの膳棚に。

しづ　ア、コレ、それは先刻に、あの猫が。

甚兵　引いて行つたか。

しづ　アイ。

はや　それでも今まで。

しづ　ア、申し、粗相な事をしやんしたわいな。

ト思ひ入れ。お早、甚兵衞、合點の行かぬこなし。唄になり、向うより有右衞門、彦助、羽織大小にて出で來り、跡より以前の善六付いて來り、花道にて三人耳打ちして、善六は路地の内へ入る。兩人門口に立つて

有右　駕籠の甚兵衛、宿に居るか。
甚兵　これは有右衛門さま、ようお出でなされやした。
　　ト思ひ入れ。
有右　サ、彦助どの、貴公にも。
兩人　心得ました。
　　ト兩人上へ通る。
甚兵　こりや、彦助さまも御同道でござりまするか。
彦助　今日は内々用事あつて參つた。
有右　ちと密々に。
甚兵　承りませう。コレ嬶アや、てまへは妹を連れて、わざと團子でも拵へねえ。
しづ　アイ、もう蒸かすばかりでござんす。
はや　蒸かすといへば、あの蛤も洗うて置かうわいな。
しづ　さうしやんせう。
甚兵　コレ、次手に酒も燗をつけさつし。

しづ　合點ぢやわいな。
はや　ハイ。あなた方、ゆるりとお話しなされませ。
　　ト唄になり、お賤、蛤と團子を持ち、お早、樽をさげて奥へ入る。有右衛門は始終お早に見惚れ居る
　　思ひ入れ。甚兵衛思ひ入れあつて
甚兵　モシ、旦那方。して今日のお出では、アノお預かり申した
有右　イヤ、その儀もあれど、内々頼みと申すは、コレ、この人相書ぢやて。
　　ト懐より繪姿を出す。
甚兵　エヽ、その繪姿を。
彦助　甚兵衛へ頼みとは、卽ちあれなる人相書。其方も聞いたであらう、先達て切腹なし、獄門にかけ置きたる、寶の盗賊南方十次兵衛、彼奴が死首、紛らはしくは存ずれども、もしや身寄りの者どもが尋ね參つて、誠か嘘か、實正糺さん其ために、倉岡どのゝ計らひにて、獄門にかけ置くところ、案にたがはぬ首の紛失。跡にて樣子を聞くところ、十次兵衛には高頬に一つの黑子あり、彼の死首に黑子のないのは、合點行かずと、面體とくと評議の上にて。
　　ト此あたりよりお早、銚子杯臺を持ち、何心なう出で來り、後に窺ふ。

甚兵　エヽ、その南方十次兵衛といふ奴は、この閻獄門にかゝりましたを、アノ、盗んだ奴が。

ト後にてお早思ひ入れ。

有右　サ、もしや身寄りの者なるか、又は十次兵衛めが生き残り、隠れうせるも計られずと、認め参つた人相書。風來者の入込むこの家、もしや似寄りの者あらば。

ト人相書を渡す。甚兵衛取つて

甚兵　畏まりました。幸ひ爰へ貼り置いて、入込む奴等を一々吟味は。

ト鏡臺の鬢付油をつけ、繪姿を傍の六枚屏風へ貼り置き

斯様に致して貼り置けば、町々小路の建て札同然。

彦助　十次兵衛めは高頬に黑子、彼奴が詮議と。

有右　首を盗んだ紛れ者。

甚兵　詮議しぬいて甚兵衛が

はやエ。

ト悄りして銚子杯を取落す。三人も思ひ入れあり。

甚兵　コリヤ、妹、何をうろたへて。

はや　ハイ〳〵、これはマア不調法な。御免なされませ〳〵、あなた方、お赦されませいな。

トあちこちとする。有右衛門思ひ入れあつて

有右　コレ、コレ〳〵、關屋どのではないか。

はや　有右衛門さま、お久しうございます。

有右　てもさても、一別以來でござる。

甚兵　コレ〳〵お早。誰れも呼びもしねえに、なぜ爰へ來たよ。

はや　アイ、御酒の燗が出來たによつて、サア、一つ飲みなさんせ。

ト側へ差寄り思ひ入れ。

甚兵　コレサ、あなた方のお出でといひ、不作法な。あなた方へ御馳走には、そんな鬼殺しは上げられない。何も用はない、奥へ行けよ、行けよ。

はや　アイ〳〵、左様なら有右衛門さま、ゆるりとお話しなされませ。

ト行かうとするを、有右衛門引留め

有右　アヽ、コレ關屋どの、ちと爰で、話して行きやれ〳〵。

彦助　酒なら身共もお相手いたさうか。

ト兩人お早へしなだれる。

甚兵　モシ〳〵、お前さん方は、滅多に妹に足をお付けなされますな。これにやァお前、亭主がござりますよ。

兩人　ヤヽ、アノ、亭主があるか。

甚兵　ある段か、しかもお侍ひでござりやす。

兩人　イヤア。なんだ、侍ひだ。

彦助　同じ武士とは、ちと氣がもめの吉祥寺。

有右　して、その武士の家名は、なんと申すな。

ト これにてお早、當惑の思ひ入れにて

はや　サヅ、その名はどうも。

兩人　申されぬとは、あやかり者ぢやな〳〵。

甚兵　モシ〳〵〳〵、いかにわしがやうな者でも、側に兄が居りまするわな。ちつとマア……コレ、コレ妹、われも爰に居る事はねえ。勝手へ行つて、團子の手傳ひでもしやれな。

はや　アイ〳〵、參りまするが、今お前が屏風に貼りなさんした物を。

ト云ひ寄るを隔てゝ

甚兵　これサ、何も女の見る物ぢやアねえ。勝手へ行けよ。

はや　でも、何やら屏風に。

甚兵　ハテ、行けといふに。

はや　アイ、參りまするわいな。

ト屏風へ心を殘し、奥へ入る。

有右　コレ〳〵、甚兵衞、この間中から、妹のお早が事を賴んで置くが、どうでもおぬしは不承知か。

甚兵　私しは不承知ぢやアござりませぬが、妹めが女房約束した、先の男が侍ひと、それもたつた今聞きました。男まさりな妹め、こりやアおまへ樣のお賴みは。

有右　斷わると申すのか。

甚兵　左樣なものサ。

彦助　有右衞門どの、この者が斷わるとあれば、此方も亦ちよつとも待ちませぬぞ。

有右　さやう〳〵、妹が事が出來ぬなら、丈左衞門どのより、おぬしが方へ。

彦助　この彦助が預け置いた詡蝶の香合、いま渡しやれ。

甚兵　ヘイ、お跡から持つて參りませう。

彦助　イヤ〳〵、跡も先もいらぬ。身共が手から渡した品、身が受取るに誰れに遠慮。サ、甚兵衛渡しやれよ。

甚兵　ハテ、丈左衛門さまへ私しが持參いたせば、いゝぢやアござりませぬか。

有右　イヽヤ、身共兩人が受取らう。甚兵衛、渡されぬか〳〵。よもや渡されまい。どうして〳〵、二百兩といふ金がなくては渡されまい。

甚兵　どうしましたと。

有右　知つて居るわえ。善六、來やれ。

善六　畏まりました。

ト路地より出で來り

コレ、甚兵衛どの。今日あなた方が、わしへのお尋ねで、成るたけは隱したが、もう叶はねえ。こなたが香合を二百兩に、わしが内へ預けた事も、みんな申し上げてしまつたワ。

彦助　あの通りだ。主人の大事な道具を預かり、二百兩の質に入れ置き

有右　いはゞおのれは引負ひ同然。使ひを寄越せば嘲弄し、相も變らぬ挨拶いたし

善六　質屋も毎日催促に、足を運べば、ぶち打擲。イヤハヤ、おへない代物でござります。

有右　只今渡すか、返答ぶて。

彦助　甚兵衛、どうだ。

甚兵　返答しませう。

有彦　すりや、今戻すか。

甚兵　否だ。

三人　ヤ。

甚兵　返す事はならねえ、否だ。

有彦　そりや又なぜ。

甚兵　盜み物だワ。

三人　ヤアヽ。

甚兵　鴻野の家のあの寶、盜みは盜めど、置き所がないゆゑに、おれを賴んだ胡蝶の香合、此方に金が入用ゆゑ、質に置いたが何とした。金の工面の出來るまで、待たつしやりませ。否なら直ぐに代官所へ、其方から持出しやれ。盜み物ゆゑ、つうくつに、置いたがどうした。賣つたら大事か。

待たぬといへば命づくサ。

トのれん口より出刃庖丁を引ッ下げ出で、畳へ突き立て

歸られざァ死ッくら。高で金なら二百兩、出來さへすりやァ請けてやる。キリ〳〵ぶさ達、歸らつしやい。

ト屹度云ふ。三人ぶる〳〵慄へ出し

彦助　有右衛門どの〳〵、サ、、歸らつしやりませ〳〵。

有右　さやう仕らう。身も最前より罷り歸らうと存じ居つた。ヤイ〳〵質屋、われは何しに來た。

善六　お前方がお頼みゆゑに參りました。

彦助　ヤイ〳〵〳〵、たわけめ、此奴、よく嘘をつく奴だ。我れ〳〵は歸る、われも歸れ。

善六　歸るのをお前方に教はるものか。併し親方の前へ、此まゝにはどうも歸られまい。

ト門口へ出る。

甚兵　歸り憎くば出刃庖丁の、劍の舞を。

ト立ちかゝる。皆々花道へ逃げる。

三人　ア、、コレ〳〵、歸り申す〳〵。

ト三人花道へとまり、思ひ入れあつて

善六　斯うもあらうか。

有彦　なんと〳〵。

善六　運つきじ

有右　嵐が誘ふ惡企み

彦助　切つてしまつた金の鶴十、

有右　お早どのには亭主が出來る。

彦助　香合は手に入らず。

有彦　これぢやァ築地へ歸られめえ。

善六　ハクショ。

ト合ひ方になり、三人捨ぜりふにて向うへ入る。甚兵衛、出刃を持ち、跡を見送り

甚兵　二本ぼうだといつて怖いものか、此方が太けりやァ其方も太いワ。質を請ける二百兩がナニ有るものか。よし有つたとて二百兩ナニやるものか。大まいの二百兩。

トよき時分二階よりお照出かゝり、引窓より下を窺ふ。甚兵衛、お照が金の事を、ふと心づきたる途

端に、鏡臺にかけて有る鏡に、引窓よりお照の影うつるを見付けし思ひ入れにて、きつて見て、持つたる出刃を口にくはへ、きつと思ひ入れ。これをキッカケに時の鐘、隣り二階の唄になり、蟲の音して、お照思ひ入れ。甚兵衞、井戸端の石を持つて來り、奥の方へ思ひ入れあつて、薄を入れし手桶を引ッ下げ出で、石の上にて出刃を磨ぐ事。思ひ入れあり、始終合ひ方、唄きれる。甚兵衞、手拭へ出刃を包み後へ挾み、跡を片付け、合ひ方、捨て鐘にて、そろり〳〵と二階へ上がり

姐さん〳〵、ひもじからうぞえ。

ト障子を明ける。

てる　イエ〳〵、お構ひなさんすな。モシ、どうぞお前アノ、與五郎さんに逢はせて下さんせいな。

甚兵　きつとわしが逢はせて進ぜるワ。姐さん、お前、先刻見せた物は有るかえ。

てる　先刻見せた物とは、何でござんすえ。

甚兵　ハテ、二百兩の金は、持つてござるかといふ事よ。

てる　アイ、そりや持つて居りまするわいな。

甚兵　サ、その金の事サ。與五郎さんに渡さうから、わしに預けな。

てる　アノ、この金をかえ。

ト財布へ書き物を卷きつけ出す。

甚兵　サ、おれに渡しな。

ト取らうとする。

てる　アヽモシ、こりやお前に渡す程に、アノ與五郎さんに、どうぞ今逢はせて下さんせえ。

甚兵　逢はせてやるよ、その金を見せな。

てる　これかえ。

ト出す。甚兵衞財布を掴み、思ひ入れあつて

甚兵　サア、連れて行く。わしと一緒に。

てる　アイ、いま行くのかえ。サア、參りませう〳〵。

ト二階の上り口の方へ行くを、後より出刃にて切り下げる。お照苦しみ

アヽコレ、與五郎さんに、逢はせて下さんせ〳〵。

甚兵　やかましい。聲を立てるな〳〵。

ト金をもぎ取り、また切りつける。

てる　アヽコレ、わたしを切るのかいなう。コレ、どうぞ與五郎さんに逢うて、この金渡したうござん

す。コレ、どうぞ與五郎さんに。

甚兵　エヽ、やかましい。逢はせるワ。聲を立てゐなく。

ト滅多切りにする。この時隣二階にて何か太鼓入り所作の鳴り物になり、この音に紛らし、二階にて甚兵衛、お照と立廻りのうち、財布を奪ひ合ひ、お照、表の方へ投げる。この財布、書き物もろとも引窓の引戸の間へ入る。程よく繩へまとひつく。甚兵衛お照をしとめ、思ひ入れあつて、死骸を二階の壁際へ押付け、上へ寢臭蓙をかぶせ、手に血のついたる思ひ入れにて、小屋根へ出、引窓の間へ手を差込み

金は慥かに引窓の間に。

ト手を差込み、尋ねる思ひ入れ。この時向うにて

與兵　エヽ、向うの内かえ。忝うござりやす。

ト、テンツヽになり、與兵衛、前幕の形、夜蕎麥賣、絲立てへ一腰を包み、これを四つ手駕籠の棒へ結び付け、息杖を腰に差し出で來り、花道にて門口を見て

アヽ、向うの門口にあるは、おれが蕎麥の荷だわえ。そんなら、あすこが甚兵衛が内だらう。やうやう尋ねつけた。

ト矢張りテンツヽにて本舞臺へ來る。此うち甚兵衛は二階より下りて、井戸端にて出刃と手を洗ひ居る。

與兵　モシ、甚兵衛どのは内かえ。

甚兵　オイ、誰れだく。

ト出刃を疊の下へ隱し

甚兵衛は内に居るが、誰れだ。

ト門口を見て

アヽ、蕎麥屋の與兵衛どのか。

與兵　コレ、甚兵衛どん、こなさんマア、昨夜ちよつと預けたわしが荷を、先へ持つて歸つて、こなさんの駕籠を打つちやつて置いたゆゑ、捨てちやア歸られず、コレく、あの駕籠も、コレ、息杖も持つてよ。慥かに渡しましたよ。

甚兵　イヤモウ、昨夜なにサ、こなたの行つた跡へ、牛醉ひが大勢來てノ、何か蕎麥を食ふくと云ふから、こいつはウツカリとはならねえ、此奴等は、てつきり丼や大平を、性惡すると思つたから、わしが駕籠を打つちやつてノ、あの荷を擔いで、一目散に駈け出したのよ。そこで、こなさんの

荷を、わしが内へ持つて來たのよ。

與兵　エヽ、なにかえ、生醉ひの客が來たのかえ。そりやァ大きにお世話でござりました。さうとは知らず今朝から、こなさんは、とつけもねえ人だと、正直は恨んだのよ。甚兵衛どん、昨夜からのお世話、荷を一荷拾ひました、エヽ、忝うござりやす〳〵。

ト無性に手を突いて禮を云ふ。

甚兵　これはしたり、お禮で痛み入ります。ハヽヽヽ、コレ、與兵衛どの、そりやァさうと、道具は揃つてゐるか、よく荷を改めて持つてござりまし。

與兵　なにサ、それにやァ及びませぬよ。

甚兵　ハテ、わしが念だ、改めて持つて行かつしやれよ。

與兵　さう云はつしやるなら、こなさんの氣休めにドレ、ちよつと見て行きませうよ。

ト捨ぜりふにて荷の中の膳皿などを改めゐるうち、お照の櫛、荷の中にあるを、不思議さうに取上げ見て

なんだ、こりやァ風鈴蕎麥が荷の中に、思ひがけないこの木櫛。しかも模樣は磨出しに、こりやコレ慥か七寶つなぎ。

甚兵　エ。

與兵　サ、しつぽこ煮かけ南蠻の、皿も小鉢も違ひなし、割れたが一枚ござらぬが、昨夜ちぎれたこの書き物、詮議の蔓と思ふうち、思ひがけねえこの櫛の

トちぎれし質札と拾ひし木櫛とを、一緒に持つて思ひ入れ。

甚兵　どうしました。

與兵　アイヤ、道具は揃つて居ますよ。

ト懷へ入れる。

甚兵　それでわしも安堵したの。

與兵　ドレ、一服のんで行きませう。

ト合ひ方になり、內へ入り、莨を吸ひつける。この時奥よりお賤、酒德利を盆に載せて、これを持つて來り

しづ　モシ、お前、ちよつと神棚へ上げて下さんせ。

甚兵　なんの事だ。えてゞなくば、上げてもいゝわえ。

しづ　そのお役は疾に濟んだわいな。

ト神酒を上げるとて、お早が上げ置きたる袱紗包みの茶碗の片々を取り落し、惚りして

ア、、鼠が居たわいな。

甚兵　べら坊面め、いま落したは鼠ぢやねえわえ。

しづ　それ〳〵、茶碗の割れぢやわいな。ほんにマアうろたへた、わたしとした事が

ト茶碗の片々を袱紗へ包むを、與兵衛、よく〳〵見て、さてはこの女と思ひ入れあつて

與兵　モシ〳〵、その茶碗の缺けを、ちよつと見せなんし。

しづ　アイ、これかえ。

ト出す。與兵衛、取つて見て

與兵　ヤ、、、、、これだ〳〵。コレ〳〵女中、お前は爰の甚兵衛どの、爲には、何だえ〳〵。

ト思ひ入れ。

しづ　エ、、わたしかえ。わたしや主の女房ぢやわいなア。

與兵　ナニ女房だ。ハテ、その筈ぢやアあるまいがの。〳〵。

ト腹の立つこなし。お賤、合點のゆかぬ思ひ入れにて

しづ　何の事でござんすぞいな。モシ、わたしや爰の甚兵衛の女房に、違ひはござんせぬわいな。

與兵　そんなら、三年添ふと云つたも嘘で

しづ　何ぢややら、根から合點がゆかぬわいな。

與兵　この缺け茶碗を持つて居ても

しづ　エ、、その茶碗の片々は、主の妹御のお早さんの

與兵　エ、、そんなら割れた茶碗の主は、甚兵衛どの、妹の、アノ、お早といふか。

ト思ひ入れ。この時奥よりお早、ツカ〳〵と出て、與兵衛が持つたる割れ茶碗を取つて

はや　この片割れは、わたしが大切の

與兵　こなたがお早か。

はや　アイ、割れた茶碗のこの持ち主。

與兵　成る程、物ごし、思へばその夜の

はや　エ。

ト四人顔見合せ、思ひ入れ。

甚兵　嗅アや、肩を揉め。

しづ　アイ。

ト合ひ方になり、甚兵衛の肩を揉む。與兵衛思ひ入れあつて

與兵　その持ち主がこなたなら、この片割れを合せて見やれ。

ト懐より茶碗の片割れを出して見せる。

はや　同じ模様の茶碗の片割れ。そんならいつぞや行きあひし

與兵　月も朧の雨あがり、夜道も嫌な小塚ッ原、犬をいとはぬ大膽は、男まさりか眞實か、頼むに是非

なく掛けてある

甚兵　ヤ。

ト振り返る。お早、心遣ひあつて

はや　アヽモシ、それを顯に今爰で、云はしやんしては、どうもわたしが

與兵　サ、身が術なくば、わしが女房に

はや　でも、現在の夫はあの體。

與兵　サ、亭主に恥をかゝせしと、思へど女の手一つに、成就しまいと手傳うた、わしも年季は三年の

日限りを切つた亭主だぞよ。

はや　サ、それも男の死恥を、世上の人に見せまいと、女のあるまい大膽は、跡で思へば恐ろしい

與兵　そのあらましをこれ程も、口外せぬは此方も男、男思ひに頼まれた、男の魂ひ見抜いたら、割れ

た茶碗の繼ぎ合せ

はや　夫思うて持つ夫、土より出でゝ土となり、人の成行き水向けの

與兵　茶碗も同じ土くれと、ならで逢うたが

はや　夫婦の結び。

與兵　亭主にしやるか。

はや　サ、あの大恩には約束の

與兵　三回忌まで

はや　夫婦仲よう

與兵　年が明くれば

はや　この身は尼に

與兵　それも合點。

はや　茶碗と

與兵　茶碗が

はや　互ひの固め。

ト割れた茶碗を重ね合す。甚兵衛見て

甚兵　そんなら妹が約束の

しづ　御亭主さんは蕎麥賣りの

與兵　小びんながらこの與兵衛。

しづ　アノ武家方と今までも、云はしやんしたが急にこの

はや　サ、町人の與兵衛さんに、云ふに云はれぬ義理あつて

ト思ひ入れ。

與兵　これサ、あらましを、こなたの口から、云はずばわしが代つて

ト云はうとする。

はや　アヽモシ、これ程云はぬあの譯を、今さら主に話しては。モシ、わたしに免じて

ト術なき思ひ入れ。

與兵　女房にさへなるならば、別して云ふにも及ばぬの。

はや　成る程、お前と約束通り、佛を誓ひに添ひまする。

甚兵　イヽヤ、兄貴がならねえの。

はや　エ、そんならお前が

甚兵　ならない譯は、今までも、亭主は武士だと云ひちらし、わが身も出世、この兄も、大金に成る先を變替へ。駕籠舁きの妹に、夜蕎麥賣りは當り前。左團扇はどこで遣はせる。法團扇も遣へまいわえ。

ト御早、術なき思ひ入れ。與兵衛ムツとして

與兵　コレ〳〵、甚兵衛どん、そんならこなさん不承知かえ。コレナ、駕籠舁きを小舅に持つからは、聟の與兵衛が商賣は、晝は見えても、夜ばかり、風來者か風鈴の

甚兵　蕎麥荷を擔ぐこなさんに、この妹は遣り憎い。

しづ　ハテ、さう云はいでも好いた事なら。

甚兵　いらざる事を、退いて居ろ。

ト突きのけて立上がるな、與兵衛きつとなつて

與兵　妹をくれねば云ひがかり、女房約束した時の

はや　アヽモシ、その事ばかりは、どうぞ爰では

ト切なき思ひ入れ。

甚兵　妹、われもよしにしろ。その日暮らしの聟ならば、幾人なりと取つて見せる。われにはしつかり持参の附く

與兵　甚兵衛どの、持参の附くが望みなら、わしにも持参が附きますの。

甚兵　ナニ、こなさんに持参が附くか。

與兵　望みとあらばわしが持参、ドレ、見せませうか。

ト合ひ方になり、以前蕎麥荷の内に有りし蒔繪の櫛と、書き物のちぎれを出し

與兵衛が持参はこれでごんす。

ト三人目を付ける。路地より野手の三出かゝり居て門口を窺ふ。

甚兵　反古にくるんだ蒔繪の櫛。

しづ　磨出し蒔繪の七寶つなぎ

はや　頭の道具は女子の嗜なみ、それをお前が持参にかえ。

與兵　心覺えのない櫛が、わしが蕎麥荷にあつたから

甚兵　ヤ。

ト ぎつくりする。

與兵　サ、出所云はぬが舅御へ、聟が寸志のこの持参、殊に破れた質屋の預かり、その金高も二百兩。大金持ちの山崎屋の、娘が家出も二百兩。割符の合うた

早賤　エ、。

ト皆々思ひ入れ。

甚兵　聟に取らう。

與兵　ヤ。

甚兵　持参の道具が氣に入つた。妹を進ぜる、聟に取らう。

はや　すりやアノわたしを、ぬしの女房に

しづ　それで物事納まる形。

與兵　併し初めて持つ女房、頭の道具を遣る時は、縁が切れると世の譬へ。今更どうか

ト思ひ入れ。

はや　求めませう。

與兵　ヤ、アノ、おぬしがこれを。

はや　賣上げの附く、その櫛を、求めて差せば、お前から、別して貰うた品でもなし、氣にかゝるなら賣らしやんせ。わたしが買うて差しませう。

與兵　女房に賣るは異なものと、思へど與兵衛は夜商人、商賣違ひの拂ひ物、お氣に入つたら賣りませう。して、その價は

はや　サ、求める價のその金も

三　貸して進ぜう。

はや　エ。

三　御昨今だが野手の三、その挨拶はわしがしよう。

ト　すつと入る。お賤見て

しづ　お前は先刻弟子入りに、來なさんしたお若いの。

甚兵　ア、、そんならこなたが、噂アが話した

三　弟子入りかこつけ有やうは、この妹御のお早さん、下齒に貰ふ算段で、來たその先へ、夜蕎麥賣り、與兵衛が方へ落札の、此方は後手と諦めて、お早さんなら差し櫛の、價を貸してやらうと思つて。

はや　そんならお前が、わたしへ價を

三　サ、金の代りはちぎれた書き物。

はや　櫛に卷いたる賣上げと、引合せたら

ト　與兵衛が持つたるちぎれと、野手の三が持つたるちぎれを合せ、思ひ入れあつて

「一札之事、一金二百兩也、右は胡蝶の香合質物に預り置候處實正也、尤十日限りに請戻させ候對談に御座候、月日」……ヤ、、、、こりやコレ尋ねる

與兵　宛名は駕籠の甚兵衛どのへ、質屋善六。

はや　手跡も同筆。

與兵　さては昨夜の大川橋、胡散な奴は

三　わしもござんすよ。ちぎれが揃つて安堵でごんせう。

しづ　その書き物は、いつぞや千住で

與兵　覺えがござるか。

しづ　アイ、ぬしが難儀の

甚兵　コリヤ、役にも立たぬ口出しするな。

與兵　さてこそ手がかり。

三　コレ、なんと反古でも破れでも、つぎ合すれば二百兩、その香合の道行きの、わかる書き物、お早さん、野手がこなたへ心ざし、これでその櫛買つて置きねえ。

はや　この書き物で濟む事ならば

與兵　賣つて進ぜう、その差し櫛。

ト書き物を取る。

はや　きつと渡して求めませう。

三　それで其方が納まらば、其うち櫛は預からう。

トちよいと櫛を取つて懐へ入れる。

はや　アノ、こなさんが

三　この櫛わしが預かれば、無理に搦んだ縁組みの、その縁類になるべいと、搦みこんだるわしが仲人。

甚兵　駕籠屋は小舅。

與兵　蕎麥屋は花聟。

はや　わたしは花嫁。

しづ　女髪結ひの待ち女郎。

甚兵　仲むつまじく四ッ辻の

與兵　三々九度も石ごきで

はや　割れた茶碗をつぎ合す

しづ　酌はわたしと

三　この野手が

ト銚子を持つて立ちかゝる。お賤、割れた茶碗の缺け二つ丸盆へのせて、お早が前へ持つて行き

しづ　サ、お前が飲んで

ト お早取あげ

はや　憚りながら

ト差出す。野手の三酒をつぐ。この時正面の壁へ二階より傳はる死骸の血汐、本蘇芳にて、たら〳〵と流れ落ちて、壁は一面に赤くなる。與兵衛屹度目をつけ、誂への凄き合ひ方になり

與兵　二階の樣子は知らぬども、壁へ滴るこの生血。

はや　エ、何か仔細の。

ト立ちかゝる二人を甚兵衛引退け、押入れの開きをしやんと引かへし、壁を隠す。この時押入れの内に與五郎の吹替へ、顔を隠し居る。

甚兵　こりや祝言の色直し。

三　ヤ、正しく與五郎。

ト押入れへかゝる。

しづ　エ。

ト つか〳〵と寄つて押入れの戸を元へ立てる。また壁へ血流れる。

與兵　又も血汐の

ト寄るを、甚兵衛有あふ六枚屏風を、さら〳〵と立て、壁を隠す。人相書見える。

甚兵　爰で二人が床入りの

しづ　屏風に貼りし觸れ狀は

甚兵　これぞ南方十次兵衛。

はや　エ。

しづ　屏風に貼りし觸れ狀は
甚兵　これぞ南方十次兵衛。
はや　エ。

ト與兵衛も思ひ入れ。

甚兵　人相しるす觸れ書の

三　高頬に一つの黒子あり。

しづ　アノ、聟さんの高頬に慥か。

トこれにてお早思ひ入れあって、茶碗の缺けを與兵衛が黒子へ打つける。血汐ながれて黒子消える。

與兵　さそくな女房、詮議は二階の。

ト行かうとする。甚兵衛へだてる。

三　小屋根を傳うて。

ト引窓の綱へかゝるを、お早、引退け、立廻つて綱を引く。戸は、ぐわらくとたつ。この時、綱に搦みし財布と書置ほぐれかゝり出る。皆々これを知らず

與兵　コリヤ女房、なぜ窓さした。

はや　サ、これは。

與兵　なんで俄に引窓を

はや　サ、雨もぽろつく秋の空、定めがたなき男の心根。

甚兵　そこで妹は引窓の

三　さしてこの場を暗闇に

しづ　くるめて事を納めても

與兵　時は日高の西日さす、あの引窓の引綱に、まとひ付いたる金財布、血の附く書き物、女の手跡、定かならねど、アレ〳〵、アレ、親次部右衞門とある文言。さてはお照が

皆々　ヤ。

ト目を附ける。お早驚ろき、綱を引く。又、ぐわら〳〵と戸は明き、財布と書き物、戸の間へ隱るゝ。

はや　ア、心づかざる引綱に、しがらむ緣のお照さん。

與兵　もしや二階にアノお照。

はや　アヽモシ、まだ照る日影を、うか〳〵と。

與兵　龜相な女房。

三　高頰の疵は

與兵　壁の生血と

甚兵　合せて五分々々。

しづ　晝の枕は氣を替へて

與兵　二階でなりと。

甚兵　イヽヤ、夫婦は矢ッ張り爰で。

三　あの押入れと

しづ　引窓の

三　明けて云はれぬ

しづ　二階の障子。

甚兵　障子二つは小塚ッ原。

與兵　かゝりし首と。

甚兵　來かゝる旅人。

はや　月は一つに……影二つ。夫は二人。

甚兵　よく似た面體。

與兵　思へばその時。

ト お早思ひ入れ。

はや　ア、モシ。

ト立廻り。

甚兵　開きませう。

ト唄になり、各自こなしあつて、甚兵衛、お賤が手を引き、野手の三、二階と引窓押入れ三方へ目を附け、奥へ入る。跡合ひ方、與兵衛思ひ入れあつて、絲立ての内より一腰を出し、これを帶して、つかつかと奥へ行かうとする。

はや　コレ、待つた。

與兵　エ、、放せ。

ト立廻りあつて兩人屹度なり

はや　氣色を變へて與兵衛さん、殊に用意のその一腰、すりやこなさんは腹からの

與兵　町人ならぬ身が素性、家名は卽ち。

ト屏風に貼りし人相書をめくり、お早に見せる。

はや　人相書を家名とは、さてはお前は。

與兵　コレ、鹿島參りの乘合ひに、夜船の内の楫枕、笘を敷寐のわざくれに。

はや　そんならその夜の云ひ約束、お顏知らねど御家名を、聞いたばかりの鴻野の御家中、南方十次兵衛さまといふお方は、寶紛失それゆゑに、御切腹。

與兵　殊に死骸は野晒しに、淺草野邊に身の科を

はや　晒してあるが悲しさに、夜半に紛れて恐ろしい、盜みする場へござんした

與兵　卽ち與兵衛、實名は、首になつたる十次兵衛。

はや　ヤ、、、、すりや船中にて夫婦の約束、其のち大事を打明かし、三年連れ添ひその跡は、尼になされて下さんせと、云ひ約束のお方も矢ッ張り。

與兵　サ、月は一つの日蔭者、船の約束、茶碗の結び、その節斯うとは思へども、首になつたる十次兵衛、その首盜むも南方氏、みす〳〵貞女と知りながら、包むも大事を抱へしこの身、恨んでくれるな、コレお早。

はや　二度まで結びし女夫のきづな、切つても切れぬ重緣に、儚く切れし。して又首級は。

與兵　それこそ弟南與兵衛は、面體似たるを幸ひに、兄に代つて生害なし、我れは、與兵衛と變名して、油斷を見すます寶の詮議。正しくこの家の甚兵衛が、丈左衛門より預かりある、證據は卽ちこの質札。殊にあれなる引窓に、隱し置いたる金といひ、正しく不通の妹お照、認め置いたるあ

の書き物、殊に滴る血汐といひ、詮議はこの家の。

ト行かうとする。立廻つてお早屹度とめて

はや　お顔が覺えぬお前の科、寶を失ひ閉門と、聞くと其まゝ、樣々と、金拵へて、寶の在所、手掛り求むる其うちに、死なしやんしたと聞いたもの、悲しうなうて何とせう。貯へ僅かの金ながら、與五郎さんの手詰めと見て、用立てましたも、あつて益なき五十兩。それに引替へ兄さんの、慾に目がくれ、いとほしなけに、ようマア、やみ〳〵。

與兵　サ、その人殺しの詮議して

ト行かうとする。

はや　アヽモシ、惡人ながらも血筋の兄さん、どうぞ一旦。

與兵　イヤ、蕎麥賣りの與兵衛なら、見遁してくれん事あらんが、寶の行くへ知れたる上は、我れは南方十次兵衛、助け置いては刀の手前、武士道立たぬワ。

ト夜き時分より駕籠舁き三人、門口に窺ひ居て

又　與兵衛といふは十次兵衛、倉岡さまへ。

ト行かうとするを、與兵衛やらじと立廻り。後より田中の辰、入谷の金組つく。その間に土手の又、

向うへ走り入る。與兵衛、田中の辰を門口にて切り倒し、お早立廻つて、入谷の金を草井戸へ突きこむ。兩人ほつと思ひ入れあつて

與兵　身が實名を知つたる下郎め、跡追ひかけて

はや　早うござんせ。

與兵　合點ぢや。

トごん〳〵にて向うへ走り入る。お早殘る。よき時分より生垣の外より小屋根を傳ひ、野手の三窺ひ寄り、引窓へ手を差こみ、財布を引出す。

はや　あの二階には正しく死骸、兄へ難儀のかゝらぬ内に

ト上がらうとする。野手の三、財布と書置を持ち、二階の樣子を見て

三　さてこそお照があの死骸、證據の櫛で人殺しの、訴人の上に、隱まふ與五郎。

はや　ヤ、お前は先刻の

三　直ぐに訴人に

トよき所より飛び下り、行かうとするをお早屹度留めて

はや　コリヤ、こなさんは兄さんの、訴人の上に、その金まで

三　オヽ、持つて行くのだ。コレ、お早、兄の命が助けたくば、この三さんの女房になれ。

はや　イヽエ、わたしはこなさんも、今見る前で女夫の杯。

三　彼奴も慥か十次兵衛、殘らず嗅いだ野手の三、これから段々順ぐりに、仕事にかゝつて金にする

それでもわりやァ靡かぬか。

はや　なんのこなたに返事しよう。殊に書き物添へたるその金。

ト手をかける。立廻りあつて

三　金が欲しくば。

ト お早を引附ける。立廻り見得になり、これより鳴り物になり、財布を枷に立廻りよろしく、野手の

三、お早を引敷く。この時甚兵衛、後へつか〳〵と出で、吳蓙の下より出刃を出し、野手の三を切り

倒す。お賤走り出でこれを留める。お早もさゝへるを、二人を突きのけ、野手の三を、ずた〳〵に切

り殺し、疊を蹴上げ死骸を打込む。兩人すがつて

しづ　コレ、こちの人、早まつてこなさんは

はや　惡者ながらも人を殺めて。

甚兵　サ、どうで此方は行がけの、駄賃いらずと二百兩、惡念きざしてあのお照……その云ひ譯は

ト出刃を腹へ突き立てる。兩人すがつて

しづ　ヤァ、甚兵衛どの、こなさんは、

はや　取のぼせてか、コレ、兄さん。

甚兵　イヽヤのぼせぬ、氣も違はぬ。不便や花のお照どの、殺したる上からは、幾人切つても殺しても、

命は定まるおれ一人、惡の報ひは刃の錆に、毒くはゞ皿。

ト引廻す。お早お賤すがつて

しづ　惡人ながらもこの深手、お早さん

はや　お賤さん、心がらとは云ひながら

兩人　エヽ、あさましい。

ト泣き落す。向う、ばた〳〵にて、與兵衛かけ戻り、跡より有右衛門、彦助、身構へして出で來り、

窺ひ〳〵附けて來り門口に居る。與兵衛、内の方を見て

與兵　ヤヽヽヽ、妹が敵の甚兵衛は

はや　我れと我が手にこの生害。只この上のお願ひは

しづ　娘心のお照さま、御持參ありしこの金にて、吾妻さんの身請けを首尾よう。

與兵　イヽヤ、吾妻は兄與次兵衛、身請けはすれど、情なや、お上の疑ひかゝりしゆゑ、山崎屋の家は封印、親に難儀をかけまじと、又は義理ある弟與五郎、彼れに代つて與次兵衛が、縄目の上に牢舍なし。

早賤　ヤヽヽヽヽ、すりや與次兵衛さんは牢舍とや。

甚兵　それも大方長吉を、殺せし科の、身に代る、弟思ひの與次兵衛どの。せめてこれなる二百兩、寶の質請け、あなたのお手から。

與兵　妹が一念とゞまるこの金。

ト二百兩を取りあげる。

しづ　與五郎さんへ死顔なりと。

ト押入れを明けようとする。

有右　寶の盜賊

彦助　十次兵衛。

トかゝるを與兵衛立廻りあつて

與兵　この間に與五郎。

早賤　心得ました。

ト押入れを明ける。内より與五郎、つか〳〵と出で

兩人　與五郎さま、何かの樣子を。

ト與五郎二人を見て

與五　ヤヽヽヽヽ、其方衆二人は藤屋の吾妻か。戀しい吾妻が、オヽ〳〵、二人ぢや〳〵。

トきよろ〳〵する。

はや　コレイナア、なんで其よなあどない事。すりや、お内の樣子、兄御の實義を聞かしやんして

しづ　氣がとりのぼつて其やうな。コレ、心を慥かに與五郎さん。

與兵　さては心が亂れたか。

與五　オヽ、亂れ心ぢや秋草の、尾花が招く。今そこへ。

ト行かうとする。皆々取附く。

有彦　十次兵衛、うぬを。

トかけりになり、與五郎、扇を開き、狂ひ〳〵行かうとする。與兵衛二人を相手に立廻りあり、與五郎この中へ交り、突きのけ〳〵花道へ行き、振り返つて

與五　さばえ。

トかけりにて向うへ走り入る。

しづ　あの與五郎さんは

有彦　所をうぬを。

トかゝるな與兵衛引附け、二人を當てる。甚兵衛、目を開き

甚兵　女房、妹、必ずほへるな。

ト引まはす。

はや　最早知死期の

しづ　甚兵衛どの。

ト縋る。

與兵　妹が敵は現在小舅。

甚兵　身をずた〳〵に。

ト與兵衛方へ這ひより、出刃を抜かうとする。與兵衛、この手を捕へ

與兵　お早が事を案じずとも。

甚兵　お頼み申す。

ト出刃を抜き、思ひ入れ。

早曉　南無阿彌陀佛。

彦有　うぬを。

トかゝる。與兵衛屹度とめる。この間に甚兵衛ばつたり落入る。木の頭、お早、お曉すがつて泣き落す。與兵衛二人を引敗き、甚兵衛と與五郎が跡を屹度見やり

與兵　ハテ、是非もなき

ト雙方見やつて思ひ入れよろしく、ひやうし

先づ今日はこれ切り。これより大切淨瑠璃幕、近日御覽に入れまする。さやう。

ドコドン〳〵〳〵。

幕

大詰

淨瑠璃の場

倉岡閑居の場

淨瑠璃　千種の花色世盛　常磐津連中

役名――大和園子、月見の三五郎。三五郎女房、お石。山崎屋與五郎。藝者、藤屋吾妻。三原有

右衞門。入間彦助。孳法印、簑坊。嫩巫女、小松。南方十次兵衞。倉岡丈左衞門。

本舞臺、三間の間、向う淺黄幕。一めんに柾木の垣、下の方に普賢菩薩と赤く記せし石の傍示杙、爰に有右衞門、彦助、着流し、尻からげ、大小にて、有右衞門、彦助を引とめてゐる。寺鐘にて、幕明く。

ト直ぐに木魚の音。兩人立廻つて

有右　待たつしやい。すりや彦助にはアノ、いよ〳〵。

彦助　ハテ、先刻よりも申す通り、紛失の香爐を、十次兵衞が手より差上げて、返上したゆゑ、倉岡どのゝこれまでの、惡事もどうやら露顯の樣子。さすれば我れ〳〵いつまでも、敵役で居つたなら、終ひの程もと存ずるゆゑ、これから心を改めて、次部右衞門どの十次兵衞へ、詫び致して勤める料簡。貴殿も身共と御一緒に。

有右　イヤ、この三原有右衞門は、神文までも取りかはした丈左衞門と、どこまでも同腹中と悟道を定め、初手から荷擔の今になり、何しに心を變じ申さう。貴殿も武士の意地を立て、兎も角も倉岡どのと。

彦助　イヤ〳〵、その武士氣質は昔の事。今の世界を御存じない、有右どのなら、たつては勸めぬ。拙者一人身の納まりを。

ト振り切つて行かうとする。有右衞門、又これを支へて

有右　待ちやれ。さう聞いては此まゝに、お身をやつては、有ること無いこと云ひあげられ、一時も身のたゝずみの、ならぬ我れ〳〵。この場に於て武士の共喰ひ。入間彦助、覺悟おしやれ。

彦助　そりや身共より、貴殿覺悟を。

有右　イヤ〳〵、御身まづ覺悟おしやれ。

彦助　ハテサテ、辭宜には及び申さぬ、まづ〳〵其許。

有右　イヤ〳〵、御身、まづ。

ト互ひに爭ひ、顏見合せ

彦助　然らば

有右　互ひに

兩人　覺悟いたさう。

ト思ひ入れ。此とき木魚の音けはしく、下座より四人の百姓、てんでに鋤鍬を持ち、走り出で、兩人

を取りまき

四人　動かつしやるな。

有彦　こりや百姓ども、如何いたす。

百一　百姓どもゝすさまじい。十次兵衛さまから密かに仰せ附けられて

百二　三原有右衛門、入間彦助、若しこのあたりへ見えたなら

百三　引ッ縛つて連れて來いと、いま庄屋どのから云ひつけられ

百四　その戻り足、見つけた二人。サア、覺悟して

四人　縄かゝらつしやい。

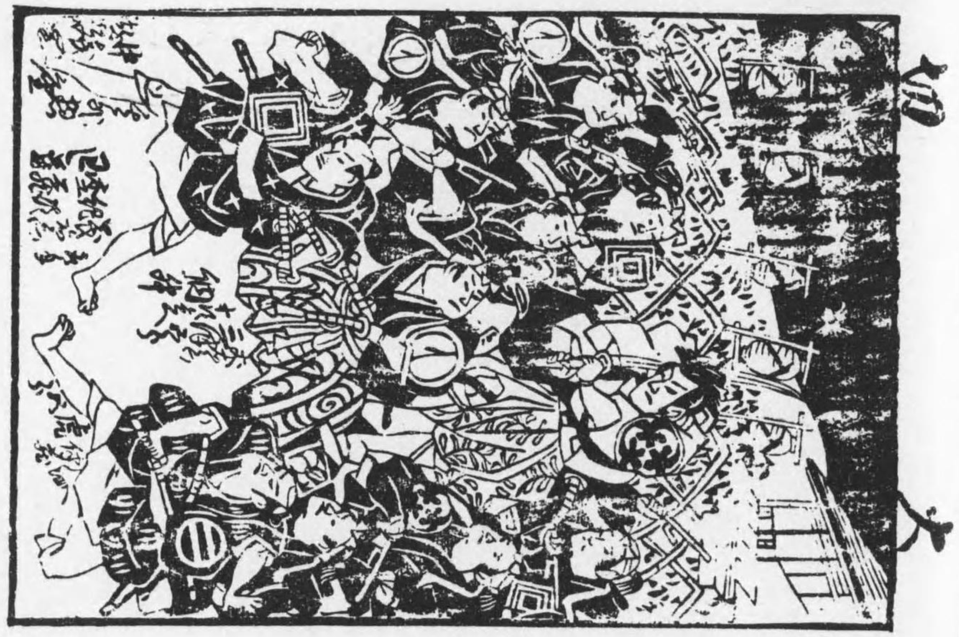
彦助　アヽ、コレ〳〵、逸まるな〳〵。身共は最早十次兵衛がた。悪人はその有右衛門一人。

有右　ヤア、卑怯な彦助、百姓ぐるめ、お身も、ともぐ。

彦助　それ、皆ぬかるな。

四人　遁しはしないぞ。

ト禪のットメになり、皆々鋤鍬を持つて立ちかゝる。有右衛門、其まゝ彦助へ拔いてかゝるを、彦助身をかはす。四人、有右衛門へ打つてかゝる。この間に彦助は向うへ遁れて走り入る。有右衛門四



人を相手にして、よろしくありて、トゞ四人は向うへ逃げて入る。有右衞門、跡を追はうとして、思ひ入れあつて刀を納め、「それ」と下座へ逸散に入る。矢張り禪のツトメにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、向う草土手、こゝに常磐津連中ゐならび、舞臺は一面に萩すゝきの土手板、花道へかけて見事に飾りつけ、日覆より染め葉の紅葉の吊り枝、下座の口、奥深に吾妻權現の幟を大分建てならべ、この道具納まる。

ト頭取出て、淨瑠璃の名題役人觸れありて「其ため口上さやう」とありて、前彈きにかゝる。

〽栴檀の實を結ぶてふ暮れの秋、月の友どちいたづらと、わやく盛りが後や先、見るを見眞似の錫杖に、鈴もふりよき神いさめ。

ト大太鼓をおろし、宮神樂になりて、向うより小松、ぴらり帽子、千早ゆふだすき、巫女の形にて、鋼女の面を後へかけ、鈴と扇を持ち出で來り、花道にとまる。

〽まだ所譯さへ白絹や、千早ふるふる袖ふる巫女の、梓の弓も張り强き、お江戸生れの目の張りも、鈴ふる手もと可愛らし、やがて色師と三つ扇。

ト摺り鉦入りの浮いた合ひ方になり、跡より簑坊、きめ頭巾、すゞかけ、法印の形にて、錫杖と扇

を持ち、出て來り

〽それと三ッ大こゝらで大山、大聖不動はこちらがお旦那、朝からお神酒でのたまくさわぐだ、ばあさんぢいさん、晩にや庚申茶めしで甲子、福德延命家内は三方、荒神の、お前を見れば松之助。

〽こちはみの助さん、親は無いかとゆふだすき、かけてぞ願ふ御最員の、惠みに育つ二葉巫女、みばへ法印うち連れて、中よきどうし來りける。

トよろしくありて舞臺へ來り

簑坊　カウ〳〵、松さん、淨瑠璃の初めから、おいら達ばかりこんなに出ちやア、あなた方に叱られやアしまいかなう。

小松　サア、それでわたしも怖うてならぬが、簑さん、どうぞ仕樣はないかいなア。

みの　待ちたまへよ。

ト手を組んで思案の思ひ入れ。

斯うせうわな。もし皆さんに叱られたら、お父さんと太夫さんに、詫び事をしてもらはうぢやアないか。

小松　ほんに、それがよいわいな。

トこの時、向う揚げ幕にて、「きちがひよ、ほうさいよ」と大勢にてはやす。簑坊、小松、向うを見て

みの　アレ〳〵、氣ちがひだ〳〵。爰へ來たらば弄つてやらう。

小松　こりや面白からうわいなア。

みの　そんなら爰で、ドレ、松助と洒落ようか。

〽萩のうは風荻の露、菊にも野路の亂れ咲き。

トかけりになり、向うより與五郎、絲毛の垂れ、紫の病ひ鉢まき、着流し、片肌脫ぎかけ、しどけなき形にて、萩の枝をかつぎ、扇を持ち、狂亂にて出で來り、花道にて

〽亂れそめにし初めより、吾妻請け出せ山崎と、うき名に立ちし戀中も、任せぬ事の數々にこの身ひとつの物狂ひ、狂ふ心は我れのみか、蝶も千種ともつれあひ、ひらり〳〵、ひらりひら〳〵〳〵。

トこの文句にて與五郎狂ふうち、ばた〳〵にて向うより吾妻、對の形、着流し、かゝへ帶にて走り出で來り、

〰そこよこゝよとその人の、行くへを尋ね、やう〳〵と、それと見るより走りつき、變る姿の淺ましと、云はで涙の露しぐれ、わしぢや吾妻ぢや與五郎さん、氣を鎭めて下さんせ、これなア申し、蟲さへも、番ひ離れぬ揚羽の蝶、我れ〳〵とても二人連れ、未來までもの仲々を仇にはせじと取りつけば、いや思ふ人はあれ〳〵〳〵、吾妻の森とうつゝなく、駈けゆく袂扣ゆる袖、しどけなりふりともぐ〳〵に、人の見る目も憂やつらや。

トよろしくあつて、舞臺へ來る。簑坊小松見て

兩人　そりや〳〵……氣ちがひよ、ほうさいよ〳〵。

ト手を叩いて囃す。吾妻、與五郎を圍つて

あづ　ア、、コレ〳〵、見ればマア、可愛らしい巫女さんに、法印さん、其やうに氣のちがうた者を弄らずと、どうぞ正氣になるやうに、お前方の御祈禱で……併し、頑是のない子供衆に、こんな事云うたとて。

みの　カウ〳〵、姐さん、なんぼ形は小さくつても、山椒は小粒で辛いといふによ。

小松　それ〳〵、なんぼわたしらが子供でも、その御祈禱はよう習うて、覺えて居るわいなア。

あづ　なんぢやえ。アノお前方お二人が。

みの　賴むといふなら今こゝで

小松　神すゞしめを。

あづ　そんならどうぞ賴むわいなア。

〰おつと合點と云ふまゝに。

〰さんげ〳〵の法印さまに、神おろし奇妙頂來と、錫杖を振り立てまいかいな。コレナ、錫杖を振らしやんせんかいな、エヽ、辛氣な人さんぢや、面白や。

〰やんれ面白や庭火たく、天の鈿女の流れとて、お釜の前のお德女郎。あつちの鍋ではちよこ〳〵、こつちの鍋ではちよこ〳〵、誰れに見しよとて紅鐵漿つけて、品やるふりも親讓りおちやつぴいではないかいな。

〰月夜烏をナア、夜明けと思ひ、てんてつてんとおきの石、かはく間もなき水仕業、飯も炊たり、しらじもごろごろと、ほんに勤めのやるせなや。

〰ませた世帶も習はうより、七つか八つかむつまじと、見えても流石頑是なし、忽まち何か爭ひの、中へ狂人分け入つて。

〰これ〳〵これはどういふ擬着か、譯は知らねど指つきり、仲よしこよし、ホツホ法螺の貝

めでたく一つ打つておけ、しやん〳〵、庄屋狩人、狐の嫁入り、臺がさ立てがさ伊達道具、振りやれお振りやれ日でり雨。

〰その雨よりもしつほりと、濡れて戀路のおどもりを、抱いて眺めてねん〳〵ころろんころ、〳〵よ、いとしねんねに何やろぞ、でん〳〵太鼓にふり鼓、鈴やつぽ〳〵手に持ちそへて、愛し育て、樂しみと、思ひし事もいたづらに、泡となしたる腹立ちと、萩の笹をちやう〳〵ちやう。

〰打たれて恂り巫女法印、おいらにやいかぬ氣ちがひどの、笑へ〳〵と振り捨てゝ、もと來し道へ逃げてゆく。

トこの文句のうち、吾妻、始終與五郎を介抱しながら、よろしく振りありて、トゞ、みの坊小松「わいわい」と囃しながら、向うへ逃げて入る。引つゞいて淨瑠璃。

〰吾妻はさゝへ引きとゞめ、情なや誰れあらう、山崎與五郎さまとては、人におくれぬ亂れ髪、吾妻が顔も見忘れてか、うつゝなやと制すれど。

〰風に尾花の誘はれて、ちり〴〵ぱつと散る風情、せん方なくぞ見えにける。

ト狂ふ與五郎を、やう〳〵引とめ介抱する。直ぐに淨瑠璃。

〰ありふれし世のすぎはひを又こゝに。

ト祇園囃子になり、向うより月見三五郎、やつし、片襷にて、手拭を鉢巻にして、蝶花形と丁子車の紋つきたる團扇をもち、女房おいし、同じく對の形にて、誂への、やまと團子の荷を、さし荷ひ擔ぎ出で來り、花道にとまる。

〰今度仕出しぢやなつけんけれども、雪か花かの上白米を、癡話と手管で晒してひいて、情でこねてしつほりと、色で丸めて二人して、よなべ仕事に搗いてや投げし、名物を召しませ召しませ家土産に、買はうなら今ぢや〳〵、今を盛りの花道を、荷ふ女夫の大和團子え。

トよろしくありて舞臺へ來り、荷を下ろし

三五　サア〳〵、買はつしやい、買はつしやい。

いし　お土産に召しませ、搗き賣りの

兩人　大和團子の評判々々。

トこれを聞き與五郎見て

與五　ヤア、吉原の俄が爰へ來た。サア〳〵、大和團子が所望々々。

あづ　アレ、せうどもない。其やうな。

三五　ア、モシ、おかみさん、旦那が所望と仰しやるに、お前が兎やかう仰しやるは、エ、、さては左がきゝますな。

いし　モシ〳〵、私しどものいし〳〵は、どんな上戸のお方さまでも、酒の肴になされますぞえ。

三五　まづお目通りで夫婦が搗き賣り。

いし　古からうとも、ナア申し。

ト此うち三五郎、荷の中より臼と杵を出す。

三五　ソレ〳〵、嬶ア、こゝらで

兩人　しつかとせい。

今の世の中、仲人いらぬ、しつちくはつちくつぎ煙管、ヤレモサウヤ、ヤレ〳〵サテナ、刻み莨がヤレ仲人する。

しやうねめ〳〵。

ウヤヤレ〳〵サテヤレサテナ、落ちよ〳〵と落しておいて、壁に蔦の葉のきごころ。

イヤ〳〵園子にかこつけて、亭主をのろく性悪め、コレ何もかも知つてゐる、この頃となりの居候ふと、あぢな目つきで愛想に、煮花の茶から袖口の、ほころびかゝる色事と、へ

へ、見れば違ひはござんすまい。

コレ、そりやお前なんぢやいな、其方を戀にわしが身は、三味線の絲よりも、細くやつれてなんよえ、臼ひく唄がとりもつて、引木の手に手しめられし、悪性男に惚れたのが、わたしが不請、女房に、なりふりさへもいとひなう、ほんに男猫も抱いて見ぬ、まじな心を知りながら、どうしてそんなとまくしかけ、云はれてそれは園子屋の、やきもち喧嘩と見ゆるうち。

また狂亂の心づき、立ちあがるより。

鎭まる此方、吾妻は其まゝ抱きとめ。

あづ　コレ、申し與五郎さん、心をつけて下さんせ。アレ、餘所のお方はあのやうに、お內儀さんを思うてぢやに、お前はわたしが露ほども、可愛うはないかいなア。

ト與五郎、吾妻を見て

與五　ムウ、さうして其方は。

あづ　吾妻ぢやわいなア〳〵。

與五　成る程、其方は藤屋の吾妻、爰も矢ツ張り吾妻……の森、其方は藝子、こなたは名所、どちらも

どちらも……オヽ、吾妻ぢや〳〵。

〳〵吾妻といふ名はその昔、たけき尊のおかもじさん、お船遊山にすいとなる、そのすいさまのしたはしく、戀を信濃の碓氷にて、わが妻やいのとのたまふより、吾妻とこそは名けたり、我れも尊にあらねども、我がつま戀し吾妻はと、そぞろ涙にいとゞ猶。

あづ　マ、それ程までに。

〳〵わたしをば、思うて下んすお心は、嬉しいながら憎らしい、お前のくせで逢ふたびに、藝子々々で内證は、三味線枕に客さんと、ねからないこと無理な事、云うてじらして、口舌して、女子を泣かす程でマア、氣ちがひとは野暮らしい、正氣になつてと取すがり、涙ぞ戀の誠なれ。

ト此うち三五郎、おいし思ひ入れあつて

三五　道理こそ先刻から、をかしい素振りと思つたが、ヘエ、そんならあなたは、おきちかえ。

いし　さうして與五郎さまと仰しやるからは、もしやアノ山崎屋の。

あづ　アイ、その與五郎さんぢやわいなア。

三五　それなれば先刻から、致しやうもあらうもの。私しは兄御の與次兵衛さまに、御恩になつた、月

見の三五郎といふ者。これは卽ち女房おいし。

いし　承はれば十次兵衛さまとやら、お屋敷へ御歸參遊ばし、それゆゑ殿樣の御婚禮も近々。そのおめでたに與次兵衛さまも御赦免なされ

三五　山崎屋の家は與五郎さまで、新たにお立て下さるよし。それゆゑ諸所を手分けして、與五郎さまのお行くへを。

ト此うち吾妻、いそ〳〵として

あづ　そりやマアほんの事かいなア……モシ〳〵、與五郎さん、アレ、今のをお前、聞いてかいなア。

與五　なんぢや聞いたか。聞いたかとは、時鳥か……但しは辛子か、意見の事か。

ト吾妻思ひ入れ。

あづ　何を云うてもあのやうに。

三五　サア〳〵、ようございます。どんな事を仰しやらうと、オイ〳〵と御意次第。

いし　それ〳〵、お氣に逆らはぬやうにさへなされば、自然と狂氣は直るとやら。

三五　マア〳〵、云ふなりさんぼうがようございます。

ト此せりふのうち

與五　アレ〳〵、あそこへ行くのは、隨德寺の角連坊め、さては彼奴も、エ、エ、色の浮世ぢやなア。

〽坊さんが〳〵、醫者の眞似して小脇差し、それえ〳〵、それ〳〵羽織着て、伽羅で樒の香を隱し、世の中はこはやの酒に揉まれて粹となり、粹が身をくふ蛸坊主、お足の不足はなぜでんす、乙姫さんへの心中に、てもそれは不躾せんばんな。

與五　ハ、、、、、蛸といへば、コレ〳〵、田町が二の替りの俄の趣向、どうぢや、聞きたい。サア、皆も話して聞かしや〳〵。

ト三人顔見合せ思ひ入れ。

三五　ハ、ア、さては先生、吉原きどりと見えるな。

いし　あのやうに仰しやるもの、なんなと話さずばなるまいぞえ。

あづ　ソレ〳〵、どうなりと間を合せて、あの狂氣の靜まるやうに。

三五　サア、お前は町の藝者ゆゑ、俄は知つてゐなさらうが、こちらは俄を見に行く隙さへ。

あづ　さうではあらうが、わたしも話さうほどに、マア、お前方よいやうに。

三五　嬶ア、酒や牡丹餅が出たら用心しやれ。こりやアおきつに、化かされたも知れないぞえ。

いし　なんのいな。マア、なんなりと好い加減に。

與五　サア〳〵、俄の話しはどうぢや、早う聞きたい〳〵。

三五　よいワ、てんぽの皮とやらかさうか。

いし　それがよいわいな。

〽まづ吉原の全盛遊び、牽頭末社もうちむれて、女藝者は我れ一と、綾羅をまとひ錦繡の、飾りをなして趣向なす、あるが中にも取りわけて、椋鳥踊りの拍子とり。

〽しげさ〳〵と戀にしやる、しげさ〳〵の御勸化、山里越えても參りたや〳〵、しげさ〳〵の御勸化、山里越えても參りたや〳〵、おまん、おまんは高い山から谷見れは、おまん、おまんは可哀や染分け襷で布晒す。

〽佐渡で咲く花、いやさのさつさ、新潟で開くえ、とかく新潟は、いやさのさつさ色所え、可哀や染分け襷で布晒す〳〵、おまん、おまんはさつてもおもしろ雁つばめ。

ト直ぐにあとの唄のかゝりになり、浮かぬ吾妻を兩人して無理に踊らせる。吾妻、是非なく振りになる。

〰忍ぶ夜はそちら向かんせお月さん、色の世界ぢやに。
〰辛氣らし。
〰逢うた夜は、撞いておくれな明けの鐘、色の世界ぢやにな、辛氣らし、エ、辛氣らし。

與五 面白い〳〵。今の俄を見るにつけ、後の月見は藤屋の二階で、底意くまなき夜と共に、飲みあかした大騒ぎ。ソレ、その時の總踊り。サア〳〵、音頭々々。

〰音頭〳〵々々に不狂人、狂はかされてひと踊り、これも迷惑かしのえ。

トこれより四人摺り鉦入りの手踊りになる。

〰色の千種のなんなか〳〵に、萩の下露濡りよとて萩の、浮氣な〳〵うは風に、割れ木瓜のいたづらな、桔梗と知らぬおとこめし、葛の恨みを苅萱に、ほんにこほるゝ藍の花、可愛らしさの女郎花。

いし こりやどうしても直らぬわいなア。

三五 それ〳〵、思ひ出した事がある。コレ〳〵、髪に法性寺の聖人より戴いた、妙見さまの祕符のお守り、利生は速か。與五郎さまに。

ト懐より錦の守り袋を出す。

いし ほんに、それではお氣も直らうかいな。

あづ サア〳〵、ちやつとお守りを。

三五 オット承知……こんなざいせぜこう良藥病卽消滅不老不死南無柳島妙見大士。

ト守りを與五郎へ戴かせる。ごんト時の鐘、薄ドロ〳〵にて、與五郎、つと起上がり、本性になりし思ひ入れ。

あづ モシ、心を慥かに持たじやんせ。

三人 與五郎さま〳〵。

ト與五郎あたり見廻し、吾妻を見て

與五 ヤ、吾妻ぢやないか。

三人 心が附きましたかえ。

與五 さうして其方はいつの間に。

あづ サア、お前に別れしその後に、兄御さまのお情で、わたしは身儘になつたれど、山崎屋はお咎めゆゑ、其方はどこへも出されぬと、矢ッ張り藤屋に居るうちに、お前が狂氣の噂を聞くと、あるにもあられず、やう〳〵と、めぐり逢うてもしどないお身。

與五　ムウ、そんなら田中に忍ぶうち、甚兵衛はじめお照が身の上、兄者人の難儀の樣子、其方の事も苦になつて、ハッと思ふとそれから夢。さうして、あのお二人は。

三五　私しどもはお兄御さまの、大抵御恩になつた者。

いし　マア〳〵、お心がついて此やうな。

あづ　もう〳〵〳〵、わたしが嬉しさ、お二人さん、推量して下さんせ。

三五　イヤモウ、その筈。お氣の附いた上からは、何もかもめでたいづくし。詳しい事は道々お話し。マア〳〵、早う私し方まで……併しそのお姿では……コレ〳〵嬶ア、おれはちよつと小梅へ行つて、駕籠を雇つて來る間、おぬしは此お二人に。

いし　アイ〳〵、しつかりとお附き申して居るほどに、お前はちつとも。

三五　オヽサ、直ぐさま。

あつ　そんなら早う。

三五　ドレ、行つて參りませうか。

〽心も直ぐな土手つゞき、小梅の方へと。

トこれにて三五郎、向うへ急いで入ると、直ぐにバタ〳〵になり、下座より有右衛門、走り出で來り、向うを見送つてゐる吾妻に行きあたり、互ひに驚き、顏を見て

有右　ヤ、わりやア吾妻だな。

あづ　さういふお前は。

與五　有右衛門。

有右　與五郎、うぬも爰にうせたな。十次兵衛が歸參より、身に火のついて來た我れ〳〵。倉岡どのもこれから勸めて、高飛びをする有右衛門。吾妻に丁度逢つたも幸ひ、丈左衛門どのへ連れてゆくその上、權九郎が指の身代り、本人なれば與五郎、われを引ッ立てゝゆく。二人とも、きり〳〵うせろ。

ト吾妻與五郎を引立てようとする。おいし、これを支へて二人を圍ひ

いし　イヤ、わたしが預かるお二人さん、滅多にさうはならぬわいな。

有右　小癪な女め。ならぬと吐かせば

いし　どうさんすえ。

有右　身共が斯うして。

トおいしを掻きのけ、兩人へかゝる。おいし、有右衛門が帶をとらへて引戻す。吾妻與五郎、有りあ

ふ臼を二人して引摺り、隔てにする。此うち淨瑠璃。

〽しや面倒なと立ちかゝるを、有りあふ臼にてさそくの隔て、振りきり又も向うづら、眉間を杵の撞木づき、打たれてどつさり尻もちつき。

〽めでた〳〵の若松さまよ、枝も榮えて葉も茂る、おめでたや、千代の子おめでたや。

ト三人にて有右衞門とをかしみの立廻りよろしくありて、トゞ、落ちゝる穆にて、立廻りのうちに罠を拵へ、有右衞門を打倒す。有右衞門、はずみに倒れると淨瑠璃。おいし身を枷に押へる。與五郎吾妻、臼をころがし、有右衞門が脊中へおしを置く。有右衞門もがく。

兩人　この間に、ともゞ。

いし　サア、お出でなされませ。

〽千秋萬歳萬々歳と、手を打ちつれてぞ。

ト與五郎さきに、吾妻が手を引き、向うへ入る。おいし、有右衞門を押へつけたる見得。

三重にてこの道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、正面、九尺の屋體、大和葺き、跳らへ打ぬき障子三枚、左右建仁寺垣、石燈籠、

植ごみ寒竹の藪、跳らへの門口、四ツ目垣、秋草手水鉢、すべて鴻野家下屋敷、倉岡丈左衞門閑居の庭先。爰に丈左衞門、着流し、一本差し、庭下駄を履きて、手燭を持ち、屋體に腰かけ、藪に目をつけ、竹の下に雀、大ぶん群がりゐる見得。時の捨て鐘、雀の囀にて道具とまる。

ト直ぐに跳への合ひ方、四方にて拍子木の音を限りなく亂調に打つ。丈左衞門思ひ入れありて

丈左　ハテ、いぶかしき、庭前に、夜陰に群がる小鳥の鳴く音は心得ぬ……野に伏勢あるときは、飛鴈つらを亂すの譬へ。殊さら四方に打ち立つる殺伐の音聲、時を告げゆく柝にあらず。爰は鴻野の下館、丈左衞門が閑居といひ、この身の云ひ譯立たずして、身共を召捕る手くばりなるか。ハテ、心ならざる今宵の振舞ひ。ハテ、何とやら。

トあたりへ心を附け、小鳥に目を附け、小雀飛び去る。矢張り時の鐘、向うより彦助、以前の形にて、すた〳〵と出で來り、門口より窺ひ

彦助　丈左衞門どの、彦助でござる。密かに小門を。

トほと〳〵と訪づるゝ。

丈左　入間氏、夜更けてござるは心得ぬ。

トつか〳〵と行き、門を明ける。彦助内へ入り、外へ思ひ入れありて

彦助　丈左衛門どの、最早この所に住居は無用。サ、とく〳〵爰を。

丈左　すりや、某が企みのあらまし。

彦助　十次兵衛めが言上なし、殊に胡蝶の香合を、彼奴が手より差上げて、貴殿や我れらが身の上遁れず、有右衛門めも裏切りなし、明朝未明に上屋敷より、お召しと云ひ立て、何氣なう貴殿を呼びよせ、詰め腹切らせん企てござれば、當所の住居も只今限り、身共も逐電仕る。サ、貴殿も早早お立退きなされい。サ、、お立退き〳〵。

トせり立てる。丈左衛門思ひ入れあつて

丈左　すりや、隱し置いたる胡蝶の香合、十次兵衛が手に渡り、彼奴は立身、丈左衛門云ひ譯なく、命にかゝはる時節到來。ハテ、是非もなき。

彦助　サ、それゆゑ爰を。

丈左　暫らくこの身を隱すには、故郷でござれば、本國河内へ。

彦助　遠路と申し、本海道は人目ござらん。

丈左　晝は忍びて夜毎の旅。それも間道山越えに。

彦助　片時も早く。

丈左　承知いたした。貴殿も早く。

彦助　心得ました。

ト捨て鐘、合ひ方にて彦助、向うへかゝる。丈左衛門は門口をさし、障子の内より亂れ箱を取り出し、内より數通の書き物を取り出し、見る事。彦助、花道にて、向うへ礫を合ひ圖する。揚げ幕より中間、弓張りをともし、跡より丹下、次郎、黑具、捕り手の形、大小にて、窺ひ出で來り、兩方、行きあひ

兩人　彦助どの。

彦助　御兩所。

丹平　して、丈左衛門が落ちゆく先は。

彦助　彼れが本國、まさしく河内へ。

次郎　身を隱さんとの彼れが白狀よな。

彦助　御兩所には、コレ。

ト二人へ囁く。

兩人　心得た。庵の左右を。

ト思ひ入れ。中間、提灯を消す。兩人門口より内を窺ひ、竹藪へ忍ぶと、彦助、中間に囁き、そろ〳〵と門口へ來る。此うち丈左衛門、密書をよく〳〵改め見て

丈左　身共へ一味の家中の諸武士、取りおく神文、内意の密書、殘し置いては、可哀や彼れらが。

ト思ひ入れあり、書き物を、だん〳〵と手燭の火にて燒き棄てる。此とき兩人門を窺ふ。捨て鐘、合ひ方、向うより捕手頭、鉢卷、陣笠、たすき野袴大小、重ね草鞋にて、十手を構へ、ひそ〳〵と窺ひ、出で來り、彦助、捕手頭に囁き、門口に手配りして窺ふ。

家名を記せし數通の書き物、燒き失なへば後の憂ひも。

ト思ひ入れ。此とき彦助、門を訪れ

彦助　丈左衛門どの〳〵。

ト丈左衛門思ひ入れあり

丈左　彦助どのか。

彦助　お明けなされい〳〵。御安堵でござる。吉事でござる〳〵。

トこれにて丈左衛門、門口をそつと明け

丈左　又お來やつたか。

彦助　御安堵なされい。おめでたう存ずる〳〵。

中間　丈左衛門さま、御安堵なさるゝめでたきお知らせ。宙を飛んで參りました。

丈左　彦助どの、下部を召しつれ、丈左衛門が吉事とは。

彦助　お喜びなされい。貴公のお身に恙はござらぬ。

丈左　ヤ、、、、、そりや、どういたして〳〵。

中間　御安堵なされませ。十次兵衛めが持參の寶は、眞赤な似せ物。

丈左　ヤ、なんと申す。アノ寶が。

彦助　サヽ、寶は似せ物。上を僞はるお咎めにて、又ぞろや十次兵衛、御前の表は不首尾の樣子。下部が只今もの語り。

丈左　アノ十次兵衛めが。

彦助　サ、この上ともに其許に氣遣ひござらぬ。最早御安堵。

中間　只今これへ、殿より赦免のお使者の入來。

彦助　氣遣ひ召さるな、丈左衛門どの。